

馬

大藏省記録抜萃 十二

八函	二十四架	二七冊	第十類
----	------	-----	-----

カ

国立公文書館

分類

2 A

排架番号

33-9

① 1129

1129

左

○驛遞回談原書

明治六年

帝國日本ト亞米利加合衆國ノ間ニ取結タル
郵便交換條約

下ニ載名スル西員ハ各其政府ノ命ヲ奉リ帝
國日本ト亞米利加合衆國ノ間ニ左ノ郵便交
換條件ヲ約セリ

第一條

方今サンフランシスコト日本ノ間ニ往返スル
氣船ヲ用イ又ハ今後西郵便局ノ允准ヲ得テ右

内史文庫

記録寮

西所ノ間ニ航海スル氣船ヲ用ヰテ日本帝國ト
合衆國ノ間ニ往復スル信書新聞紙並各般ノ印
刷物其他商品ノ見本雛形ヲ兩國ノ間ニ遞送交
換スベシ而シテ又兩國ハ他ノ外國ノ間ニ往復ス
ル同前ノ郵便物ヲ遞送スルノ媒メヲ勤ムベシ

第二條

兩國ノ間ニ遞送スル諸般ノ郵便物ヲ交換スル
ニ於テハ合衆國ハサンフランシスコ日本ハ横
濱ヲ以テ右郵便物交換本局ノ地トナスベシ
其他交換局ヲ要スル節ハ西郵便局ニテ協議ノ

上何時タリ凡之ヲ取設クルヲ得ベシ

第三條

兩國ノ間ニ交換シタル信書ノ遞送賃ニ就テハ
相方ヨリ其費用ヲ保ツニ及ハス然レハ兩國凡
ニ郵便切手ヲ製シ此條約ニテ定タル郵便税ヲ
互ニ取立ツベシ

信書一通ノ重量半ヲニス以下半ヲニス迄ノ郵
便税ハ合衆國ニ於テ十五セント日本ニ於テ十
五錢ト定ムベシ半ヲニス若クハ半ヲニスノ分
數毎ニ合衆國ニテハ十五セント日本ニテハ十

五錢ノ増税ヲ拂フベシ右郵便税ヲ拂フノ仕方
ハ兩國凡ニ信書ノ發出スル國郵便切手ヲ以テ
前拂ニ致スベシ全ク郵便税ヲ拂ワザルカ又ハ
一通分以下ノ税ヲ拂フノ信書ハ之ヲ遞送スベ
カラズ然レ凡一通分以上ノ税ヲ拂フノ信書ハ
假令其重量ニ比シテ不足税アル凡之ヲ遞送ス
ベシ而シテ其不足税ハ其届先ヨリ取立テ其配達
局ニテ之ヲ收入スベシ

兩國ニテ復取タル信書充分其定税ヲ前拂スル
モノハ別段増税ヲ取ラズレテ之ヲ配達スルハ
勿論タルベシ

然レ凡此條約施行ノ後十二月ヲ経テ信書一
通ノ定税ヲ合衆國ニテ十二セント日本ニテ十
ニ錢ニ減ズベシ

合衆國郵便局ニテハ日本ハ宛テ發出スル或ハ
日本ヨリ受取タル新聞紙及ヒ諸般ノ印刷物其
他商品ノ見本雛形其重量ニ「ランス」若シテハ其
分數毎ニ二セントノ郵便税ヲ收入スベシ

日本郵便局ニテ合衆國ヨリ請取タル或ハ合衆
國ハ宛テ發出スル前同断ノ品物ノ郵便税ハ日

本條國ノ郵便成規ニ後ノ郵便税ヲ取立ツベ
新洲紙及ヒ諸般ノ印刷上木物其他商品ノ見本
辨形ハ之ヲ渡送スルニ於テ兩國各ニ定則アリ
然レ此定則ヲ越スベカラズ若シ右ノ品ニ内
ニ在リテハリタル文字アルカ或ハ信書ヲ密ニ
封入スルハ其品ヲ信書ト見做シ其定税ヲ取
出カレ諸又又兩國ノ税法ニ依テ右品ニ内ニ
輸出入税ヲ課スル片ハ之ヲ取入セザレラ得ズ

第四條

日本ヨリ合衆國ニ受取タル信書ノ郵便税ニ拂
ヒ不足アルトキハ其不足税ヲ取立ツルノ外更
ニ一通ニ付六「セント」ノ過代金ヲ命ズヘシ而シ
其過代金ハ合衆國ノ郵便局ニ之ヲ收メ置クベ
シ又合衆國ヨリ日本ニ受取タル信書ノ郵便税
ニ拂ヒ不足アルトキハ其不足税ヲ取立ツルノ
外更ニ一通ニ付「セント」ノ過代金ヲ命ズベシ而
シ其過代金ハ日本郵便局ニ收メ置クベシ

第五條

横濱兵庫長崎ノ日本郵便局ヨリ支那上海合衆

五
完

國ノ郵便出張所ハ發出スル信書新聞紙及ヒ諸
般ノ印刷物其他商品ノ見本雛形ノ往復又ハ上
海ヨリ日本ハ發出スル右品ニノ往復又ハ上
海ト支那上海ノ間ニ遞送交換スベシ而シテ
之ヲ遞送スルニ日本ト支那トノ間ニ定期ヲ以
テ往復スル各衆國又ハ日本ノ郵船ヲ用ユベシ
亦日本ノ各港ト上海ノ間ニ往復スル信書ノ遞
送價ニ就テハ兩郵便局ニテ其費用ヲ保ツニ及
バズ船期方ニテ郵便切手ヲ以テ左ノ割合ノ區
別郵便料ヲ取立ツベシ

上海ヨリ日本ハ發出スル信書一通ノ郵便税ハ
其重量毎半「ランス」若クハ其分數毎「セント」新
聞紙並ニ物價表ハ一箇毎ニ「セント」諸般ノ印
刷物其他商品ノ見本雛形ノ重量ニ「ランス」若ク
ハ其分數毎ニ「セント」宛ノ割合ヲ以テ上海合
衆國ノ郵便出張所ニテ取立ツベシ

日本ヨリ上海ハ發出スル信書一通ノ郵便税ハ
其重量毎半「ランス」若クハ其分數毎ニ六錢ト定
ムベシ而シテ新聞紙并ニ諸般ノ印刷上木物其他
商品ノ見本雛形ハ日本郵便成規ニ定メタル郵

左
完

便條より日本郵便局より取立ツベシ

此条は條々依り定まり郵便税ヲ充分前拂也

前日條書ハ、切之ヲ遞送スベカラズ

第六條

兩國、中何カカ、國ヲ通過スル他ノ外國ニ送

復タル郵便閉囊ヲ遞送スルニ於テハ兩國ニ

テ各之ヲ遞送スルノ權利ヲ保セシム直ツ其國

隨テ郵便線路ヲ當ヘテ水陸片右ノ閉囊ヲ遞送

スルヲ得ルベシ

他ノ外國ヨリ各衆國ヲ越エテ或ハ合衆國ヲ越

ヘテ之ニ送ルベキ閉囊ハ水陸運片左ノ割合ヲ

以テ日本郵便局ヨリ合衆國郵便局ニ拂フベシ

第一ノギレコ、ブリヂュスコロニビヤ、カナダ、及ビ

北亞米利加洲英吉利領地ニ宛タル或ハ之ヨリ

發出スル郵便閉囊遞送ノ税ハ陸運ノ時ハ信書

ノ重量三十グラムニオニス、毎ニ六セント新聞

紙并ニ諸般ノ上木物其他高品ノ見本雛形ノ重

量一判口グラムニテグラム毎ニ三十三セント

ト定ムベシ

第二アリキヌスコロニビヤ、北亞米利加英吉利領

五
完

トキハ、中央亞米利加及び南亞米利加其他西
印度諸島ニ宛テタル或ハ之ヨリ發出スル郵便
閉囊渡送ノ税ハ海運ノ時信書ノ重量三十「グラ
ム」ニ至ルニ至ル各般ノ印刷物其他商品ノ
見本雛形ノ重量一「キログラム」毎ニ四十「セン
ト定ハベシ

第三次英國及日耳曼其他歐羅巴諸國ニ宛タル
或ハ之ヨリ發出スル郵便閉囊渡送ノ税ハ合衆
國ト若歐羅巴ノ國々ノ間ニ取結タル郵便交換
條約ニ依ラズモタル郵便税ヲ拂フベシ

他ノ外國ヨリ日本ヲ通シテ往復スル閉囊ノ郵
便税ハ日本ニテ之ヲ行ノ權利ヲ要スルトキニ
至リ兩國合議ノ上ニテ定メタル郵便税ヲ以テ
合衆國郵便局ヨリ日本郵便局ニ拂フベシ
郵便閉囊ヲ差出ニタル又ハ之ヲ受取リタル國
ヨリ右閉囊渡送ノ媒タラ勤メタル國ハ耐ニ其
閉囊中ノ信書新聞紙并ニ各般ノ上木物其他商
品ノ見本雛形ヲ區別シテ各種ノ定税ヲ勘定ス
ベシ

第七條

皇米兩郵便局ニテ協議ノ上他ノ外國ヨリ寄出
タル又ハ之ニ遞送タル信書其他ノ郵便物互ニ
嫌ハスルノ條ヲ執リ兩國ヲ通シテ之ヲ遞送交
換スルノ條約ヲ定ムベシ尤モ其郵便物ハ開キ
棄ルニテテ遞送致スベシ
斯ク外國復復ノ郵便税ハ總テ皇米兩國ノ間ニ
遞送スル郵便税ニ其外國へ遞送スベキ税ヲ加
ヘタル高ヨリ多キヲ取ルベカラザルヨリハ書ツ
カニテ明カナルナリ

第九條

他ノ外國ヨリ寄出シ合衆國ヲ越ヘテ日本ノ届
先へ遞送スル前拂ヒタル信書ハ一通ニ付ニセ
ニト宛ラ合衆國郵便局ヨリ日本郵便局へ其定
スベシ

第十條

兩國復復ノ郵便ニテ日本ヨリ合衆國へ遞送セ
シ豫寄ノ信書ハ合衆國郵便切手ヲ以テ一通
ニ付テセント宛ヲ拂フベシ同合衆國ヨリ日本
郵便切手ヲ以テ一通ニ付テ錢宛ヲ拂フベシ

第十一條

此條約ノ各條ニ從ヒ太平洋ヲ通シテ互ニ交換
シタル郵便物ノ海運賃銀ハ開囊又ハ閉囊ノ間
ハ入信書ハ正量一「リ」ニス「每」ニ六「セント」即チ三
「グラム」毎ニ六錢ト定メ其他ノ郵便物ハ正量
一「ポンド」毎ニ六「セント」即チ四百八十「グラム」毎
ニ六錢ノ割合ニテ互ニ勘定スベシ

第十一條

兩國並復テ郵便ハ其察出毎ニ書狀目錄ヲ添附
シ之ニテ兩國並復并ニ兩國通リノ郵便物各種ノ
單方ヲ記スベシ而シテ兩國通リノ郵便物各種ニ

總テ兩局ノ間ニ生シタル差引勘定ハ三月毎
ニ精算ニテ備リ越シタル局ヨリ貸付越シタル局ハ
應ニ勘定スベシ

第十二條

合衆國ノ政府自費ヲ以テ現今ガニフランニシテ
コト横濱ノ間ニ半「グラム」毎ニ送込ル郵便物ヲ維
持シテ郵便物ヲ送込スル間ハ日本政府ニ於テ
テ兩國海港ノ間ニ航海スル他ノ郵船ヲ以テ送
送スル郵便物ノ運賃ハ全ク自費ヲ以テ拂フベ
キ「リ」ヲ承諾スベシ

第十三條

兩國何れも、港に於て一船より他船へ閉塞ヲ
爲すこと其後終つて周旋スル事ニ耐ニ引段
入費ヲ割とカハルコトハ其後終つて事ニ耐ニ引段
手數附クモ取ルベカキ也

第十四條

公衆國郵便局より日本郵便局へ送付スル書
件公用信書ニ准テ送付スル事ニ耐ニ引段
手數附クモ取ルベカキ也

第十五條

兩國政府並公使館ノ間ニ往復スル公用信書ハ
滯滞ナキコトヲ別段注意ヲ加へ庶稅ニテ之レヲ
遞送スベシ

第十六條

兩郵便局兼諾ノ上兩國ノ間ニ交換スル郵便ヲ
以テ書留郵便ヲ遞送スル方法ヲ設クベシ
書留郵便手数料ハ合衆國ニ於テ十セント日本
ニ於テ十五錢ト定ムベシ但シ書留信書ノ郵便
稅并ニ其手数料片充分前拂ヒ致スベシ
兩局片書留郵便ヲ送達スル局ニテ前條ニ定ム

五
完

之レテ手数料ヲ變正スルハ勝手タルベシ

第十七條

兩郵便局兼諾ノ上ニテ此條約ヲ施行スルニ付
猶更細ノ規則ヲ取設クベシ而テ時宜ニ依リ時
ニ此規則ヲ增訂改正スルコトアルベシ

第十八條

凡テ充分定税ヲ前拂ニタル信書ハ其配達ノ
爲ニテ附在仰ラ捺ムルノ外其信書ノ右方ノ
且脚ニ捺シ以テ拂濟ニシトシ且此ト記シ置ク
ベシ又不充分ノ税ヲ前拂ニタル信書ハ其不

足税ヲ右同様墨ヲ以テ記シ置クベシ

第十九條

凡テ書トナリタル信書ハ魚税ニテ兩局ヨリ互ニ
之レテ差戻スベシ而シテ之レテ差戻ス期限ハ兩
局ノ没書規則ニ従テ之レテ處分ニ或ハ一月
毎ニ之レテ差戻スベシ

第二十條

日本融匯貨幣ヲ合衆國ノ貨幣ニ變ニ合衆國ノ
貨幣ヲ日本貨幣ニ變スル片ハ合衆國ノ一市ヲ
以テ日本貨幣一圓ニ當テ合衆國ノ一セントヲ

以方日本一錢ニ當リ、等用スベシ

第二十一條

合衆國郵候局ハ此條約確定ノ後何時ヨリモ
日本郵候局ヨリ六ヶ月前ニ報告ニ以テ臺灣
在ル合衆國ノ郵候出張所其他現今日本ノ版圖
ニ設立セル或ハ今ヨリ後取設ルベキ郵候出張
所ヲ廢止スベシ

第二十二條

日本ニ在ル合衆國郵候出張所ヲ廢止スルハ日
本ヨリ此條約ヲ實際施行ス可シ

第二十三條

此條約ハ西局ヨリ一年前ノ報告ヲ以テ何時々
リトモ廢止ニ得可シ

此條約ハ批准ヲ受テ可シ而シテ双方ヨリ成ル可
キ丈ケ速ニ批准ヲ交付スベシ

紀元千八百七十三年第八月六日即チ明治六年
第八月六日華盛頓府ニ於テ此條約本書ヲ二通
トナシ之レヲ確定スルモノ也

在米日本臨時代理

高木三郎

合衆國驛遞頭

イニスエアイクスウ井ル

余ハ此條約ヲ賛シ爰ニ合衆國印ヲ鈐シテ之
レヲ證スルモノ也

エー、エス、グラント

大統領ノ命ヲ奉

外國事務執政ハミルト、ヒレエ

華盛頓府千八百七十三年第八月六日

出納寮面議原書

明治六年

記録寮

貨幣改方規則ノ儀別紙ノ通大坂出張能勢久成
ヨリ申越候ニ付左ノ通可申遣ト存候此段相伺

候也

貨幣改方規則被設度趣致兼知候右ハ末條右
ノ件ニ遵奉可致云々ノ條左ノ通御取替可然
候尤見改人ノ内是迄證人無之ハ更ニ證人
相立候様御命ニ可被成候可相成ハ見改人ハ
總テ銀行又ハ三井組等ヨリ為差出同行或ハ

左
藏

同額證人。相立候様致度候此外別ニ差支商
之候間御申越ノ通施行可被成候也

明治六年十月七日 馬渡出納頭

勢及成殿

收方則其條

依ノ附ニ證書可致候萬一箇書及ニ證書ノ筆
幣裏不度ノ世ニ候熟又、岳金銀等ニ見誤可
ハ不度等箇之證ハ現在ノ及記計面ノ證
勿論然也又ニ權御ニ及ニ萬一其ノ體
却ニ能ハ申出ニ證及ニ權御致

在此條例ニ違背ニ作為ニノ釀出又ハ儀有之

ニ於テハ其事由取札ニ相當ノ処テ可致事

當地幣改方規則別紙寫書ノ通明治四年十月

定置有之候処當節ノ取扱振ニ至リ候テハ遺漏

ノ慮有之候ニ付猶此度別紙ノ之通令一層手

堅規則取設度依之及御打合候間御許受之上早

御指令相成候様致度此段申進候也

明治六年九月廿三日 勢及成

馬渡出納頭殿

貨幣改方規則

貨幣ハ天下ノ重寶ニシテ上下之ヲ重セサル
ハ無シ別ニテ政府鑄造ノ權利ヲ保有シ人民
信ヲ政府ニ委スルカ故真贋^精粗檢閲ニ於テ
ハ執毫ハ過ナキヲ要ス然ルニ近來贋造多ク
紛乱致シ候ニ付テハ再三念入レ聊ニテ疑
敷分ハ衆議ヲ以分別ニ獨意ヲ以裁断ス可ク
テサレハ論ヲ俟テサレ所也尚又造幣寮ニ地
金輸納或ハ回索ヨリ新貨其他ノ請入方從前
ヨリノ方法モ存之トイヘトモ聊ニテモ疎漏
ノ取扱有之候テハ銘ニ身分ニ關涉候事故尚

一層取締ノ為今般更ニ左ニ告示スルノ條ニ
張シ熟讀ニ苟モ過誤失錯ナキ様各意底ニ銘
臆ニテ以テ遵奉從事スベシ

第一條

一勤任中何程繁多ニ候共貨幣改方ノ儀ハ下見
ヨリ上見へ指出夫ノ順序ヲ經可申一人ニテ
改候儀ハ不相成且又同勤ノ者三人不揃内ハ
変テ改ニ取挂リ申間敷候事

第二條

一貨幣取扱中聊ニテモ不正ノ取扱振見聞候ハ

一 早ニ可申出爲一見應ニ致置ニ於テハ本人
ハ申ニ不及見聞ノ者迄同一之由事タルベシ
第三條

一 田ノ見取ノ名ヲ出庫ノ金銀類運送時限ノ前
ニ至リ候ハ、現取未取ノ區分ヲ立之テ差別
帳ニ記載シ確實立在ノ上納庫取計ヲベシ
第四條

一 新貨請取ノ期限ニ至リ當集ヨリ相違候得ハ
出張ニ當リ及買之ヲ領集ニ造幣寮ニ隨行
上兩名以上ノ立會ヲ以買數ヲ取ノ相違無之

上ハ兩名以上ノ確證ヲ入記ニ錠締ノ上錠ハ
官員へ渡シ封印等同様押調スベシ

第五條

一 箱前へ上銘書方ハ本日請取ニ圓數并月日及
入記ニ有之各名ヲ記載スヘシ是ハ入記封印
等置据ノ儘瞭然タラニ事ヲ要ス

第六條

一 諸取ヘキ貨幣多數ニシテ調數護送行届カサ
ルトキハ兩名三名内至四五名其機ニ應ニ増
員スルヲ有ルベシ

第七條

於此際察圖教調濟入記封印等第五條ノ旨順
相濟候上立會官原ノ指揮ヲ受テ當察ハ護送
ルハ之若護送人一員ノ節萬一途中ニ於テ
警懼切候節ハ不取敢其番ノ封印ヲ調ニ取歸
候上ニテ最前記名ノ兩員立會再取ノ上更ニ
兩員ノ封印ヲ翻ルニ

第八條

一諸取濟封印調理ノ上權專ノ後、一又内御二
又護送ノ旨ノ須知ニ尊隨方立共ニ可加方及
而正方着車ノ上御金庫前へ持運候迄始終車
廬ヲ配意スヘシ萬一不叶ニテ移座セニテ
敬セハ直ニ亦處等ニ命ニ同役ノ旨ノヲ呼寄
セ之ニ代ラシムベシ

第九條

一新貨其他ノ類出入ノ節凡テ金庫開閉ノ節ハ
政方正副ノ中一人宛立合可ニ就中請取ノ新
貨ハ本日出張ノ人員立會圖教ヲ予加ニ照準
ニ封印ヲ眼前ニ再改ニ毫ニ漏漏ノ取扱勿ル
可ニ

在ノ件ニ禮奉ノ上萬一箱中及袋詰ノ貨幣等不
 足ヲ生シ又ハ古金銀見誤不足等有之節ハ現在
 ノ入記封印ヲ證トシ其本人ヲ以償却セシム可
 クハ勿論聊ニラモ此條例ニ違背ニ過クハ釀シ
 タルモノハ情實ハ不得已ルニ出ルニ雖モ相當ノ
 所方可有之候事

明治六年九月

大詔出張

出納寮

左院

驛遞密檢書

明治六年

記録寮

尋常郵行給方ニ取扱兼候ハ敬ハ通發ヲ運送ス
 九、五、三、一 要事ニシテ方西洋諸洲ハ皆郵便為留ノ
 海峽立派政廉專方之ヲ常リ候得共即今我ハ熟
 練ノ郵便取扱人ニ方ハ此郵便為留ノ法ヲ之開
 片難ク存候間与分ノ内進用各地ハ郵便切手並
 飛行脚支費等ノ渡方又各地ヨリ郵便切手賣下
 少代金請取方ニ相責候金高ヲ康意控運先會社
 ハ下渡シ右請取金並渡物ノ運送ハ同會社ハ為

陸

三

陸

引請其運送ノ席ヲ以テ此度相伺候改是郵便規
則中金子入書狀ノ部ニ記載ノ通り金子入書狀
ノ運送配座ヲモ為致度依テ別紙約定書ノ通
牌頭ヨリ同會社へ約定可為致十有候此段相
御申報也

大正十一年十一月十五日

大藏大輔并土筆

正院御中

御之通

金子入書狀運送配座方並該道郵便取扱

所へ因方御渡可相成飛行脚先賃錢及此
取扱所御手當金且郵便切符ノ運送方各
取扱所ヨリ郵便切符量下ノ代金取集書
運送方共陸運先會社へ御手付調成候ニ
付左ノ御手付約定セリ

一金子入書狀ノ運送方配座方及受取證書ノ書
載方且之ヲ驛遞察へ納方青紙ノ分帳可定規
則是ヨリ後改心スルノ規則ニ遵ヒ會社自己
ノ都合ヲ以テ規則外ノ取扱ハ不致事

各郵便取扱所へ可渡飛行脚先賃錢取扱人御

會社ノ一郵便物等ノ配達ニ本寮及此大隊出
非兩本崎郵便從前會計課ニ可相渡仕該書
ノ通リ相渡承取人ニ可相渡由立時共其仕
島田川邊ニ置ルノ渡口ニ可渡取取後取
費付乃以金銀兼其ニ相渡會計課ニ可相渡
申取第ニ通リ受取兩書ノ係細書之類共是
川邊外ノ諸山内ニ相渡勿論諸山渡一遷書
於此ニ仕渡書總乃其意漢一書安一議ニ
相渡取取書
一會社ノ相渡一第ニ各社ノ取取及一約定

乃置并或ハ他ノ會社ト約定致ニ金子入書狀
ノ配達方並郵便取扱所ニ可渡金錢及此郵便
切書受取金共為取扱候儀ハ差支無之然此其
取扱人約定人且約定ニハ會社ノ各前地
及此判定書詳細各寮會計課ニ相届置勿論大
阪出張所長並郵便所ノ管知人此場ニ分
ハ是ニ同所ハニ相届置可申事
一商業繁多ニハ月々會社ノ往復取取前之地
ハ其往復ノ郵費金子入書狀ノ送送配達可致
又一坊商業無之取郵ノ土地ト並ニ郵便道ノ

通スル限リ八月、一回ツ、必金子入書狀及
ハ波ニ物受取物ノ運送配達方共可致事

但函館、外北海道ノ國々ハ別ニ約定可致
事

一各地ハ可渡金錢及ヒ各地ヨリ可取集金錢等
金子入書狀郵便切手トモ會社ノ手ニ在之候
内ニ紛失致候節ハ會社ヨリ之ヲ辨償可致先
當火ニ取打燒失候カ地震ノ為メニ不可追ノ
災ニ罹リ候カ政府ノ手戈ヲ動シ候程ノ騷亂
中其土地ニ於テ賊徒ノ為メニ掠奪被致候様

ノ大事件ニテ會社ノ心カラ存シ候ヲモ保全
難相成既難ノ場合ニ及ヒテ紛失候分ハ別段
ノ事

一各地ハ可渡金錢及ヒ郵便切手各地ヨリ可取
集金錢ノ運送賃トシテ別紙郵便取扱所地名
録ニ記載スル里程ノ總數四千三百七拾七里
半ハ東海道中山道陸羽道甲州道ノ平均賃錢
一里ニ付三錢四厘四毛ヲ乘シ是ヲ一人分ノ
賃錢トシ往二人分復二人分都合四人分ノ合
計六百〇二圓三拾四錢四厘ヲ以テ現今ノ額

ト定メ毎月繰越ヲ以テ御下渡可相成ル是レ
リ以テ御下渡金高ニ増減
可致事
一金子入書状應送并配達債ハ其書状ノ重量ニ
結テ可取立郵便債ヲ除クノ外其封入ノ金
高ニ就テ受取ヘノ運送料ヲ悉皆會社ハ可相
渡事

右約条ノ箇條ヲ急リ或ハ之ヲ履行セラルニ
於テハ其犯セシ一件ニ付百圓以上五百圓以

下ノ辨料ヲ其事柄ノ輕重ニ依リ相拂ヒ可申
事

右之条件五ニ満足ヲ以テ一致約締致シ各各自
書ノ姓名并ニ實印ヲ以テ之ヲ證シ候条相違毎
之依テ此書ヲ二枚ニ認メ其一通ハ驛遞察他ノ
一通ハ陸運元會社へ相藏メ置候也

壬申十一月

驛遞頭

陸運元會社

頭取

遠々郵便。敷補遺。三五府下其外横濱神戸等
ハ申ヨシ五六回ツ。時間ヲ期ニ為致配達候。付
各省寮司府縣等ハ配達時間ノ責毎々様郵便請
取審製送候様神達被下度依之御達案取調此段
相伺申候也

明治六年三月八日

淡澤正五位

正院

御中

伺之通

明治六年三月十四日

各省寮司府縣等へ御達案

郵便配達ハ極メテ迅速ナルヲ主旨トシ殊ニ三
府ハ横濱神戸ニ於テハ日々五六回宛時限ヲ刻
シテ之ヲ配達致シ候ニ付猶且迅速ヲ要シ候處
諸省寮司兵隊化所及ヒ出張ニ其他ノ官廳ハ配
達ノ分一頁ニ達スル一封ノ為メニ動モスレハ
取次ノ都合ニ寄リ多分ノ時間相貴候間玄閣或
ハ通用門等ノ内一ヶ所可然場ニハ郵便請取箱
ト記シ候箱ヲ差出置書留郵便ノ外請取證書ヲ
要セサル信書等ハ皆其箱へ為差入仕丁或ハ門

番ノ者共便宜之ヲ分違致シ或ハ之ヲ護シテ其
常事人ハ渡々ヘキ規則ニ相決シ候条本月三十
日迄ニ右請取箱製造致シ便宜ノ場ニハ差出
置日其分違方位下等へ可申有止而京大限横濱
神戸出飛所有之由ハ其出張ニハ此段早速可
相違事

水理圖議簿

大島新規湊取立伺書

當縣管下伊豆國附大島之儀東西航海之高船風
濤之節者必右島へ寄相凌東南之方ニ波浮濤有
之候得共風樣ニ寄入港難相成仍テ航海人之為
々同島岡田村地况字乳々崎地内堀割大小之船
船碇泊相成候様自費ヲ以致落成度旨度會縣士
族小田民次郎並神奈川縣管下相州高座郡磯部
村農中村太吉横濱相生町貳町目川村三郎向ニ
添翰ヲ以願出候間熟考仕候處管下大島之儀ハ

東山臥里南北五里周回拾里余之島方。一、中興
一、原山下中島有之頂上。二、硫煙立上。三、燒種
四、時、里方近。五、鳴動致。六、候白山裾四方。七、少
島中平曠之地。八、少東北。九、海邊造出。十、西、新
島村野澤村北。十一、開田村泉澤村南。十二、若林地村東
南之方。十三、波濤濤有之北濤口。十四、狹、内、畧西
三町南。十五、威町深谷。十六、五尋之。十七、候得與口狹
故、火船入港難。十八、同島周回。十九、岩岸。二十、新島岡田
兩村。二十一、新島岡田之候。二十二、揚船場。二十三、歸船等類
相成。二十四、同島。二十五、海出。二十六、候得與。二十七、島。二十八、海之船

船風波之節凌方。一、論島方。二、魚等東京種出
都合。三、同島方。四、一、船。二、三、相威可申。併、不業威。功
如何可有之哉。三、候得與。四、共、得、小、家、地、檢、査、破
小、鬼、据、云、有、之、自、費、以、差、取、立、相、顯、候、儀、二、行、氏
次、節、外、兩、名、顯、之、通、被、御、付、可、然、哉
一、本文之趣。島、波、相、糾、候、處、島、中、故、障、船、頭、之、音
中、出、候、依、之、繪、圖、面、相、添、此、段、相、同、申、候、也
壬申十一月廿八日 尾柄縣參事 榊取素房
尾柄縣權令 柏木忠俊

大藏文轉井上馨殿

伊豆國大島守乳々崎二堀港願出候ニ付伺

書

尼柄縣管下伊豆國大島之儀周圍岩壁ニシテ僅
ニ波濤湊港々所有之龍海之船船颶風怒濤之節
可破船箇所壞之候亦及困難候ニ付有度度會縣
士被小細紙次御外ニ名協力由貴々以同島守乳
々崎二堀港願出候ニ付伺
貴為是浦或十五ノ年間ハ津之船ヨリ港幾取立
度別紙之通度柄縣ヨリ伺出候ニ付取調候處同
縣之使劑ニ付相成兩益之工業ニ付御届可申

存候仍テ書類相添此段補伺候也

明治六年三月十二日

大藏大輔并上殿

正院

柳中

伺之通

明治六年三月十五日

田議簿

小田縣士族病死後相續人ナキ者家祿給與
之儀伺

別紙^量量考致シ候處士族一家之本人病死之後相
續人之義ハ當至申三月正院ニ御伺之振合ニ有
之候間^花花ニ御指令相成可然候也

御指令案

書面伺之趣當主死後時日ヲ遷シ相續之者無之
候未ハ家祿難被下候奈民籍ハ編入致ス可ク事
但死後時日不相立サレ義ニ候ハ、早々親

戚之者ヨリ相續為願出於地方實際相續シ
家跡相續為致候様可加説諭事

子申六月

輔

士族病死後相續人無之內家祿被下方之儀

獨書

士族獨身者ニテ病死致ニ候節養子相續可致之
處差向相應之人物無之詮議中或ハ當主病死後
妻女而已ニテ相續人無之者ハ家祿被下方如何
相續可然哉至急知差國被下度此段相續候也
子申六月廿四日
小田縣

大藏省

御中

國債寮回議原書

司法省工部廻答案

旧藩ニ負債御所分之内衣食住薪炭其他一切ノ
雜品代金拂滞ノ類更ニ借用證文ニ改メ無之ト
モ賣掛帳ニ會計掛ノ調印又ハ會計所ノ押印有
之ハ公債ニ相立候積御裁判相成於當省差支
無之哉御回答之趣致承知候右ハ縱令没場ノ印
其掛ノ調印有之共借用證文ニ改メ無之掛ハ總
テ公債ニ相立規則ニ付若公債ノ御裁判ニ相
成候テハ御所分上差支不少候因テ此段及御回

答候也

總裁

本年第八十二号御布告舊藩之負債償還御處分之内衣食住薪炭油其他一切ノ雜品代金拂滞之類更ニ借用證文ニ改メタル分ハ公債ニ相立候事ト有之候處右拂滞ヲ借用證文ニ改メスニテ賣掛帳ニ其藩之會計掛ノ役賣調印致シ置候カ又ハ會計所之押印有之分ハ前同藩債ニ相立候積リ裁判及ヒ御者於テ御差支ハ無之候哉及御問合候否至急御回答有之度候也

明治六年十月十九日 司法大輔福岡孝弟

大藏省事務總裁

大隈參議殿

各國留學書類

森少辨務使米國へ被差遣候ニ付用意金等之儀
別紙之通外務省ヨリ伺出御聞届相成候間馬相
添御達申入候也

庚午閏十月十三日

辨官

大藏省

御中

今般森少辨務使米國へ被差遣候ニ付テハ用意
金其外共大概敦島少辨務使英佛等へ被差遣候
節之振合ニ準テ受取申度候間右之趣兼而大藏

省へ御達被下置度此段申進候也

庚午閏十月九日

外務省

辨官

御附紙

御中

伺之道

森少辨務使米國へ被差遣候ニ付航海并彼地在
當諸貴之儀別紙之通伺出伺之通御聞届相成候
間馬相添此段御達申入候也

庚午閏十月十二日

辨官

大藏省御中

今般森少辨務使米國へ被差遣候ニ付テハ此程
敦島少辨務使へ御沙汰御座候振台ニ準シ尤之
通相伺候

一横濱ヨリ米國紐約迄船賃等上等貳人分九百
拂

但米國飛脚船ニ而横濱ヨリサニワラニシ
ス工造船賃並同所ヨリニユウヨルリ迄兼
氣車代共

同下等貳人分三百拂

御同断

航海中諸雜費三百拂

彼國官負等へ可差遣御品買上代五百拂合貳

十拂

在者出帆前之入費

彼國於テ家賃食料馬車代并家屋賃借迄之間

旅籠代共大九積六千七百拂

但是八一ヶ年九積リ彼地到着試験之上ハ

追テ巨細申上候積リニ有之候

一壹ヶ年少辨務使へ可被下御手當三千拂

一同斷權少記へ八百拂

合壹万〇五百拂

右之通相伺候間可然候ハ々大藏者へ被 仰渡

候様致度此段相伺候也

庚午閏十月九日

外務省

辨官御中

可為伺之通事

別紙之通森少辨務使ヨリ申出候ニ付書面之通

為相心得可申哉此段相伺候也

庚午閏十月八日

外務省

辨官御中

今般私儀為少辨務使米國へ被差遣候ニ付テハ
危之件々心得方奉伺候

米國在留之御國人者都テ少辨務使ニテ管轄
被可申事

但官華族ニテ其國當学中ハ管轄之事

一交際之事務大小トナリ本國之廟議ニ決テ取

可申事

一其内小事ハ往復之暇讓之且差迫候節ハ臨時

專決之積ニ候事

一交際之事務ハ一ニ條理ヲ以辨別ニ能其情ヲ

通シテ兩國交誼之親厚ヲ主トスヘキ事

一御國於テ各國公使等應接之始末其國政府ニ

關スル事件ハ速ニ少辨務使へ御報告之事

一米國ニ當學罷在候生徒共學業之都合ニ寄轉

國等願出候節ハ便宜ニ應テ轉移為致候義モ可

有之且怠惰勉勵並行狀等之可否ハ其教師ヨリ

時々書面ニテ為差出右ヲ本省へ差送候事

一彼地着之上ハ旅店ニ止宿罷在候テハ過分ニ

失費モ相懸可申候間相當之家屋賃借致奴僕相

雇手賄ニ致可申尤候得者右家賃並奴僕給金等

ハ彼地之振合ニ應シ差遣シ公事ニ付出行致候
前之馬車代人足賃筆墨紙其外公用ニ屬シ候節
雜費ハ都テ御入用ニ相立追而筆勤本省ハ差遣
可申候

一公用ニ付其國巡行之旅費ハ素ヨリ御入用ニ
相立且雜内若旅行先ニテ都合ニ寄外國人相雇
候義ニ可有之且交際上必用之書籍ハ御入用ヲ
以テ買上可申候事

一時宜ニ寄彼官員等ハ御國產物差遣不申候テ
ハ不都合之場合ニ有之ハ存候間右用意ヲ多ク

添器并絹布類買上持參可致候

一彼國官員等ノ招待ニ逢響應ニ預リ候義モ可
有之其節ハ右答禮ハ勿論又ハ都合ニ寄彼相招
響應可致事モ可有之右ハ御入用ニ相立可申候
一御用金之儀ハ橫濱英國オリエニタルバンク
ニ而為替相組證書ヲ取ニテ持參可致尤跡ヨリ
御差遣之令モ右同様手續ヲ以テ御差立有之度
候且御入用差支無之様ニ翌年々年之令ハ正月
前ニ相達候様就海日數其外大凡三ヶ月ト見積
前年之十月初旬右バニリハ御渡有之候様致度

候

彼地より差立候御用状之内事柄機密ニ係リ

候御ハ總テ御輔御兩名宛差立可申存候

一同行之者病氣之節ハ却入用ヲ以テ医者ニ相

懸治療差加候様致度候事下々礼病氣治療費ハ可為私費事

右之件々相伺候

庚午閏十月七日

森少辨務使

御附紙

可為伺之通事

別紙之通森少辨務使ヨリ申出候ニ付書面之通

為相心得可申哉此段相伺候也

庚午閏十月八日

外務省

辨官

御中

租稅方法

左
藏書院

租稅方法 四議簿 長崎縣

租稅寮 正局

對馬國村々公役錢廢止ノ儀ニ付伺

長崎縣

右檢書院 指令案左ニ相伺申候

書面管内對馬國村々公役錢ノ儀全ク對馬

國村々ニ限り旧藩主基ニ用トシテ相納候

品代ニ相違無之上ハ申出ノ通り本年ヨリ

可相廢又余稅法調書ノ内廢置ニ分ノ義ハ

左ニ指令ノ通り可相心得事

完

才五ヶ条船税ノ義才六ヶ条船前税相納候
上ハ二重ニ付可相廢旨申出ニ候処船税ノ
義ニ付ラハ不日一般ニ相違候品モ可有之
候間先以テ從前ノ通り收入可致事

一才七ヶ条船魚代ノ儀ハ旧藩主適與收入申
付外ニ浦裏加又ハ受浦税等相納重課ノ節
ニ自浦裏加ハ据置船魚代ノ義ハ相廢度旨
申出ニ候処右ハ最原前西海灣ノ漁業ニ限
リ候趣ニ相違候間自然右船魚代納申付候
々々外受浦税等ニ見合セ輕税ニハ毎之候

ヤ夫是照考浦税ノ方至当ノ收税ニ候ハ、
廢除間届ニモ可相成候得共右等詳細申出
毎之ラハ当否會議出来兼候条今一應詳細
取調可申出事

一才九ヶ条漁税ノ内請浦税ノ義年季ヲ以テ
為受員魚獲ノ高ヲ斗リ税金相納候趣ニ候
処税額定方記載毎之テハ輕重当否モ難相
分候条右方法及ヒ税目トモ詳細取調尚可
申出候

一才十ヶ条職工商税ノ儀ハ追テ一般ノ規則

相多候迄ハ従前ノ通り可据置答ニ候得共
自然難据置分モ有之候ハ、見込ノ趣尚可
申出事

右々条ヲ除クノ外ハ申出ノ通り聞置候事

對馬國村々公役錢廢止ノ義ニ付再伺

当縣管内對馬國村々ヨリ公役錢ト唱ヘ合金四
百七十一圓四十九錢八厘相納来リ候公今年ヨ
リ廢止ノ義本年六月三十日付ヲ以テ相伺候處
右公役錢ノ義旧藩主是所用野菜類正納可致ニ

遠隔運送不便ノ故ヲ以テ代納申付候ヨレ旧官
負申繼ノ趣ヲ以テ廢止申出候ニ前テ佐賀縣ヨ
リ差出有之旧嚴原縣従前租稅方法書中ニ公役
代米ノ名義記載有之公役錢ノ方ハ不相見自然
異名同物ニハ毎之ヤ公役米ニ候ハ、先般申出
ノ原由トハ大ニ相違致シ居候間今一應取調可
申出且租稅方法中雜稅ノ種類一切記載毎之差
支ノヨレニテ一廉限リ稅額名稱并ニ存廢見込
ノ趣ヲモ記載可差出旨本年七月廿日附ヲ以テ
御指令ノ趣致義知候公役代米等ノ原由佐賀縣

へ撰合候処別紙写ノ通り申越全ク異名同物ニ
毎之原由判然致レ候上ハ公役儀ノ儀当年ヨリ
相廢止申度且雜稅種額及ヒ名称等別紙租
稅方法書ノ内從前ノ通り据置ト可相廢見上朱
書ヲ用進達申候間可然御指令有之度此段尚相
伺候也

明治六年十一月二日

長崎縣令官川房之

租稅權頭松方正義殿

對馬國租稅方法

對馬國租稅ノ儀ハ万治四年未年檢地有之其前
不相分其後寛文二年寅年尚檢地有之其法他ニ
殊ニシテ高段別ノ唱へ毎之蒔種間教ヲ定メ田
畑木廬共上々上中下ノ四等ニ分テ惣レテ上畑
ニ回レ一間ノ蒔種ニ石取麥廿二石八斗ト稜リ
ニツ五歩ノ物成ニシテ麥五石七斗ヲ定法ト
ナスト蚤モ今村々現平均ヲ見ルニニツ六厘四
八ノ取附ニ相成居則今其法ニ依ル

上々田 一間 三千歩

蒔種 三歩一合 一石

上田 同 早音歩

一石五斗

中田 同 六千步 二石

下田 同 一万五千步 三石

上々畑 同 三千步 前種 一步五斗 一石五斗

上畑 同 四千步 二石

中畑 同 七千步 三石五斗

下畑 同 二万步 十石

上木庭 同 四万步 二十石

上同 同 四万步 二十四石

中同 同 六万步 三十四石

下同 同 十万步 五十石

右一間ト唱ヘ候ハ四尺ニシテ四尺ヲ以テ一間トレ何尺何寸何分何厘ト小教ニ至ル一步ハ方六尺五寸今新地檢地ノ節モ右ノ法ニヨリ步教地位ノ上中下ヲ極メ前目ヲ附上畑ニ廻ス其法候令畑一万步ノ内千六步ハ中畑四千步ハ下畑ナリ其時ハ六千步ニ一步ノ前種五タヲ撒ケ三石前トナレ其三石上畑一間ノ前目ニ石ヲ撒ケ中畑ノ前目三石五斗ヲ以テ

割レハ上畑一石七斗一升四合ニ又ハ又薪ヲ
得又下畑四千歩ニ五タヲ撒ケニ石薪ナリ其
ニ石ニ上畑一間ノ薪目ニ石ヲ撒ケ下畑ノ薪
目十石ニテ割レハ上畑四斗薪ヲ得相併具村
ノ並物成一石ノ数ヲ築レテ物成ヲ得茶園物
成ハ二百目斤八十斤取ヲ以テ一間ト定メ上
畑ニ回ス算ハ有教ニ上畑ノ薪目ニ石ヲ撒ケ
八十斤ヲ以テ除之上畑ノ薪目ヲ得並レ物成
ヲ撒ルナリ惣シテ木庭ハ常作不相成事ニテ
土地且舗キ木庭ハ作跡繁茂早ク土地悪レキ

場ニハ作跡繁茂屋キ故ニ上々木庭八十ケ年
上木庭八十二年申木庭八十七年下木庭ハ廿
五年ヲ以テ木庭ヲ伐ルノ年期トス依テ上畑
ニ回ス時薪目ヲ年教ニテ割り物成ヲ撒クル
ナリ

一間字ノ事

従前ヨリ六尺五寸ヲ用ユ

一枿ノ事

従前ヨリ京枿ヲ用ユ

一公役ノ事

是ハ郷々ヨリ入用ノ諸品公役ニ相納候處
運送不便利ノ村方モ有之ニ付郷々不公平
毎之々々寛文年中公役銭ト唱へ六十文ヲ
一匁トレ七十貫匁ニ相極メ民戸ニ賦課シ
諸品ハ代價ヲ定メ現品相納候村方ハ定價
ヲ引去リ相納未候

廢止ノ儀別紙ヲ以テ相伺候

一船税ノ事

漁船元船一艘ニ廿二錢七匁宛

此漁船元船ト云ハ商船ニテ魚類ヲ買入

候船ヲ云フ以下同シ

別段帆別税アリニ重付相廢シ度

一帆別税ノ事

漁船元船一艘ニ付七錢四匁宛

田舎田シ船一艘ニ付四錢四匁

此田舎田シト云モ商船ニテ漁船元船ハ

魚ノコ買入田舎田シ船ハ何品ニテモ買

入候

魚鋪漁船ニ段帆ニ限り六錢八匁宛

右ハ追テ改正道後前ノ通り收入可致候

献魚代ノ事

長繩配魚船一艘ニ付九銭宛

但鯽船ハ外浦冥加ト唱へ一浦ニ付九十

銭宛

為駒賊魚船一艘ニ付七銭ニ重宛

右両条最原書面海灣ニテ漁事致ス分ニ限

ル

田舎据長繩為賊駒トモ一艘ニ付七五銭

二重外ニ長繩漁船ハ浦冥加一浦ニ付九

十銭宛

長繩配為賊駒船献魚代ノ儀ハ旧藩中多分
ノ漁事有之常税ノ外献魚申付候ヨリ引付
相納未候ヨレニテ別段浦冥加清浦税月税
等相納候上ハ二重ノ收税ニ付相廢ニ申度
冥加ノ儀ハ従前ノ通り据置可申積リ
一諸細税ノ事

梶切細一張

十三銭五重

為賊細一張

九銭

是ハ場四ヲ不定漁事スル分ニ限り取立

未候

従前ノ通り据置可申積リ

一 漁税ノ事

受浦ト唱ヘ四季或ハ二年三年ト年季ヲ定
メ浦方ヘ若浦負其浦漁獲ヲ計リ税金相納
来リ候

但清浦中ニテ魚漁スル諸細ハ別段收税
毎之候

長繩漁船一艘ニ付一ヶ月五錢一厘宛
為賊船一艘ニ付一ヶ月三錢四厘宛

右兩条月税ハ辰辰前面海湾ニ限ル其他村
々ハ都テ清浦税相納候

従前ノ通り据置候積リ

一 賦税ノ事

一 採人問屋 一円九十三錢五厘

二 糶屋 七十一錢二厘一毛

三 紺屋 三十三錢七厘五毛

四 質屋 一円五十三錢四厘六毛

五 鬻附屋 二十五錢八厘

六 蠟燭屋 十二錢九厘

七 穀治屋 八錢一厘

八 魚問屋 十八錢九厘

蕎麥屋

十二錢六厘

桶屋

五錢七厘六毛

于菓子屋

十六錢一厘二毛五厘

餠屋

十六錢三厘一毛

酢屋

七十八錢七厘五毛

藥屋

五錢五厘二毛九厘

豆腐屋

十一錢四厘六毛

綿屋

十八錢七厘五毛

板屋

二十六錢二厘五毛

古手屋

八十七錢五厘

碓屋

十錢五厘

菟蒺屋

二十五錢八厘

鬚結職

六十錢

大工職

六錢一厘二毛八厘

右八当縣管内旧嚴原縣租稅方法兼ニ雜稅額名
 稱共右ノ通り御座候且雜稅ノ内旧貫据置分卜
 可相座見込朱書用置候間可然御指令有之度候
 也

明治六年十月

長岑縣令官川房之

租稅權頭松方正義殿

出納寮回議原書明治六年十一月分

記録寮

大藏省

其省差出未候金穀出納表ノ儀不分明ノ廉モ有

之時取調向差支へ作り候ニ付本年十月以来

別紙雛形ノ通りニテ更ニ差支へノ廉モ有之候

ハ、其次才細詳可申出此肯相違候事

但日々金穀有高ノ儀ハ臨時問合候儀モ可

有之條奈其省限り取調置可申事

表紙付

年号何年何月常用金穀出納月報

前月ヨリ越へ高 金何程 米何程

何月中収納ノ部

金何程

未切手金何程

券符金何程

米何程

未切手米何程

三府下諸税

金何程

内譯

東京

金何程

西京

金何程

大坂

金何程

海関税

金何程

券符金何程

内譯

東京

金何程

横濱

金何程

神戸

金何程

大坂

金何程

長崎

金何程

新瀉

金何程

券符金何程

五 院

酒醬油造稅

金何程

絞油稅

金何程

蚕種紙稅

金何程

生糸印紙稅

金何程

同鑑札稅

金何程

砂糖稅

金何程

牛馬鑑札稅

金何程

證券印紙稅

金何程

鳥獸捕鑑札稅

金何程

奴婢車稅

金何程

郵便稅

金何程

瀛車電信收入

金何程

官舎拂下代

金何程

物品拂下代

金何程

贖贖

金何程

貸出金返納

金何程

同利足

金何程

凡積渡諸費
遺拂殘返納

金何程

右科目ノ内甲月收入金ヲ乙月ニ至リ上納

七三モノ又八二三ノ月取纏メ上納ノ分ハ

其旨但書：記載スヘシ

通計

金何程
赤切手金何程
券符金何程
米何程
赤切手米何程
券符米何程

越高

合計

金何程
赤切手金何程
券符金何程
米何程
赤切手米何程
券符米何程

收納高

何月中拵出ノ部

外國交際費

金何程

内

何國へ使節派出
用意金

金何程

何國帝へ御
贈進物品代

金何程

何々

金何程

太政官

金何程

正院用度
何月分

金何程

月給

金何程

旅費

金何程

探偵費

金何程

祭典費
何月分定額

金何程

完

西京雅樂局
何月分定額
金何程

印書局
何月分定額
金何程

左院常額
何月分
金何程

外務省
金何程

内譯

本省常額
何月分
金何程

上海領事
館常額
但一ヶ年何程ノ處何年何月
金何程

何国公使
館常額
但云々同上
金何程

大藏省
金何程

内譯

何月分諸
費見積渡
金何程

隈防管繕
費見積渡
金何程

府下練化石
建築費内渡
金何程

但目的高金何程ノ内何程ハ
何月ヨリ何月迄渡濟

陸軍省
何月分
定額
金何程

海軍省
同断
金何程

文部省
同断
金何程

教部省
金何程

完

内譯

定額確定ノ上
ハ内譯記載ニ及ス

何月分
假定額

金何程

月給

金何程

旅費

金何程

工部省

何月分
定額

金何程

司法省

金何程

内譯

何月分常
費見積渡

金何程

各裁判所
捕七費

金何程

但本年惣額何程ノ内何程ハ
渡清殘金何程内渡

東京邏卒費
何月分定額

金何程

官内省

何月分
定額

金何程

開拓使

金何程
米何程

内譯

本使定額
何年分

金何程

但本年惣額金何程米何程ノ内金
何程米何程渡清殘金何程米何程

府縣貫屬移
住ノ者家禄

米何程

但本年惣額米何程ノ内
初年度渡

何府

米何程
米何程

内譯

内譯廣々券符渡ノ分ハ
本文ニ倣ヒ記載スヘシ

本府定額

金何程

何月分

何年諸費

金何程

允積置米

何々貸渡

金何程

何年

金何程
券符金何程

何縣

諸費

米何程

置米金

券符米何程

第二常備金
繰替金渡

金何程

奏任以上御用滞在月給

金何程

右收納拂出ニ漏レタルケ茶ハ此体裁ニ倣

ヒ記載スヘシ

拵出合計

金何程
券符金何程
券符何程
券符何程

元拵差引残高

金何程

金何程

朱書赤切手
券符入出差引過不足

赤切手

金何程

同

米何程

券符

金何程

同

米何程

赤切手並券符出納表

前ヨリ排出高ノ内前月迄ノ納高ヲ除何月一

日未納高

赤切手

金何程
米何程

券符

金何程
米何程

何月排出高

券符

金何程
米何程

合計

赤切手

金何程
米何程

券符

金何程
米何程

何月納高

赤切手

金何程
米何程

券符

金何程
米何程

差引未納

赤切手

金何程
米何程

券

金何程
米何程

年報何年何月貸出金穀増減月報

常用金穀貸出

前月迄未納高

金何程
米何程

任會計官より引續大藏省於て貸出高金何
 程米何程後前各地方於て貸出高金何程米
 何程合金何程米何程ノ内何程ハ返納消何
 程々々何々ニ有損失

貸出高

米何程
金何程

貸出合高

米何程
金何程

返納高

米何程
金何程

差引残高

米何程
金何程

石高割貸出

金何程

換前貸出ノ内
何月迄未納高

但總貸出高金何程ノ處何程
ハ返納消何程ハ何ニ有損失

返納高

金何程

差引残高

金何程

年號何年何月準備金出納月報

何月ヨリ越高

金何程

内譯

現貨

金何程

金銀地金通貨積

金何程

但從前備入有毎並返納期
限等ヲ記載スヘシ

何月中收納ノ部

貳分判改鑄

金何程

地金ヲ以鑄

金何程

造幣益金 何月分 金何程

何々ニ付何々ノ内ヨリ借入 金何程

通計 金何程

越高 合計 金何程

何月中拂出ノ部

造幣寮 何月分 定額 金何程

何所鑛山費 金何程

但何年何月分又ハ何月ヨリ何月迄惣額
何程ノ内何程渡済残何程ノ内渡

神戶間鉄道費 金何程

貨幣鑄造トシテ造幣寮渡シ 金銀地金通貨積金何程

右右收納拂出ノ部ニ漏ルタル条ハ此体裁

ニ倣ヒ逐一詳記スベシ

拂出合計 金何程

九掛差引残高

金何程

外

何々貸渡 金何程

但何月中貸渡返
納期限云々

年号何年何月勸業資本金出納月報

何月一日在高 金何程

但後前備入有毎英
迄納期限

何月中收納ノ部

官林地拂代 金何程

官厩地拂代 金何程

官用地拂代 金何程

土地拂代 金何程

除稅地拂代 金何程

荒蕪不毛地拂代 金何程

官林並損木拂代 金何程

蚕種原紙賣捌代 金何程

外通計金何程

在高
收納高 合通計金何程

何月中拂出ノ部

試驗場諸費 金何程

内譯

何々 金何程

何々 金何程

蚕種原紙賣捌方入費 金何程

内譯

何々 金何程

何々 金何程

蚕種大總代月給 金何程

内譯 金何程

何府下何人 金何程

何縣下何人 金何程

房總諸收入費 金何程

内譯 金何程

何收何々費 金何程

何收何々 金何程

右收納拂出ノ部ニ減レタル箇條ハ此体裁ニ
倣ヒ詳記スヘシ

在高並入出差引残高

金何程

外

何々貸出 金何程

但返納方法云々引当テ物云々

何々拂代未納金何程

但上納期限云々

右之通相違毎之候也

年月日

長官 印

太政大臣宛

御金庫為警戒邏卒三名ツ、日夜為相詰候様去
ル八日御撤合ノ趣致儀知候猶細詳ノ儀ハ警保
察ヨリ直ニ御打合可申候依テ此段及御答置候
也

七月十三日

司法大少丞

大藏省御中

此程御新築ノ御倉庫本月初旬弥落成ノ趣申出

候ニ自テ兼テ司法省ハ御撤合相成居候番衛
邏卒御雇ノ期近日ニ可有之ニ付右番衛規則並
猶又同省ハノ御撤合案トモ左ニ相伺申候

御倉庫番衛規則

第一條

一御倉庫外圍柵門際晝夜共二人宛相立嚴重譏
察可致事

但二人ノ内一時間毎ニ一人ツ、御庫近

傍巡邏警察可致事

御倉庫番衛規則

第二條

完

御金庫回内ノ儀ハ出納頭助ノ断毎之分ハ入門
可相禁事

第三條

非常並失火等ノ節ハ休番タリ共一同驅付出
納寮ハ申談請差圖別テ嚴重警戒可致且盜賊
乱妨等者之候ハ直ニ召捕置先出納寮ハ致
報知時宜ニ依リ近傍邏卒ヘモ致報知協力取
締可致事

第四條

御金庫回内ノ儀ハ提燈ノ外煙草其外火器相

用候儀禁止ノ事

第五條

一番衛勤方ノ儀ハ總テ出納寮ノ差圖ヲ請ケ可
申事

右ノ條々堅相守可申事

月日

馬渡出納頭

司法省ハ御撮合案

去ル七月中御撮合及ヒ置候御金庫落成ニ付還
卒御差出有之度則番衛規則御廻申候乾テハ以
降邏卒進退ノ儀ハ御省警保寮於テ主管ニ番衛

勤勞ハ總テ出納察ヨリ致差圖且給料六人分並
詰所用器械等ハ大截ヨリ可差出ニ有右給料ハ
月々警保察ヨリノ申立ヲ以テ同察へ御渡可申
詰所用器械ハ出納察ヨリ直ニ羅卒へ相渡候積
取極置申度御差支モ毎之候得ハ其筋へ御通達
出張羅卒姓名書御廻ニ有之度且時トシテ交代
等ノ節ハ其都度姓名書御廻相成候様致度此段
及御擬合候也

明治六年九月

大藏省事務總裁
參議大隈重信

福岡司法大輔殿

追テ本文規則書御差支ノ廉毎之候上ハ其主
任長官御證印ノ上御返却有之度候也

羅卒

阪元豊行

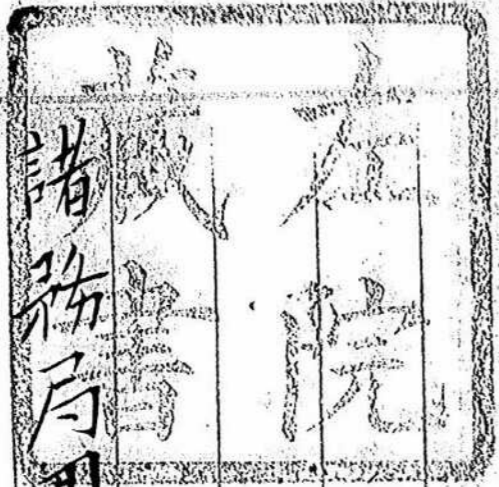
森清一

藤川直道

伊東忠政

別枝盛隆

永井為忠



諸務局回議原書
驛途療原書

明治六年
同

本
院

小濱 晋
肥村 信義

諸務局同様原書 明治六年十二月 官員増減等

○ 辨岡様ヨリ官員増加ノ義三月別紙ノ趣伺有、壬申三月ヨリ

追々増加ノ分ハ不殘相廢シ更ニ十二等十人ノ月給二
百五十四ノ積ヲ以テ指令按左相伺也

重而ノ趣ハ難別面カ至申三月ヨリ本年九月迄追々

増加イタル官員等外ハ不及申仕部仕丁ニ極ムテ相廢シ
更ニ十二等十人ノ月給二百五十四増加義別面ヨリ

照會物

一ヶ月金七十九圓 十等一人十三等一人未外一二人

同金二十八圓

其第一等係由ヨリ

仕部仕丁四人

明治三十二年九月十日

明治三十二年九月十日

十二月十日

總計二百九十四

○官負増加ノ義ニ付テ

当務ノ義ハ兼ニ申上ニ進化致シ異リ革當不亦当ノ人民
凡三十七万口殊ニ貧困係ノ事件内外多涉ニ涉リ諸務
今後ノ其成者再度官負増加相願有般指累作以作不
加増業務繁劇ニシテ休日勿論夜分迄モ一同知強作
以作何尔事務不奉有實際検査ニ処全人員ノ是ヲサレ
候ニ其共是迄ノ俸ニテハ如何様指累作ニモ調整ノ道也

之ヲ考也辺ニ復原案出格ニ決リ以テ及別ニ人口極不相当各
縣ニ定ニ難比較時実際クハ及案ニ成下ニ操事致ル也

明治三十二年十二月

神尾嘉平

大分

○長野縣ヨリ徴兵旅費渡方ノ儀ニ付伺御指令按
左ニ相伺候也

書面徴兵旅費ニ滞在手当ノ議ハ辛未正月
太政官公布ニ照ニ支給方取斗其地他議員共
医小使ホノ儀ハ伺ノ通且縣下召集ノ本入差
附添ノ戸長副途中滞在ノ宿料ホ一切官費ト
可相心得右入費ノ儀ハ別途可下渡候条明細
取調尚可伺出事

徴兵旅費渡方ノ儀ニ付伺

当縣徴兵昨明治六年二月徴兵使出張於縣下換

查相濟候其節ノ入費御渡方陸軍省、伺置候処
右入費ノ義ハ御省、申立候様同年十二月廿二日
指令相成候尤旅費ノ儀ハ一時立替渡置候得共
其他尤ノ廉々如何可取扱哉

一徵兵令第一章中第六條議員兩手當ノ義ハ旅
費規則十等、引充旅費滞在トモ可被下哉

但右議員ノ義ハ區長副ノ内人撰ニ徵兵署
、詰切中滞在御手當同断

一右同章中第九條雇醫御手當ノ義ハ旅費ノ十
等、引充旅費滞在トモ可被下哉

一徵兵署ノ備入候小使ノ義ハ縣廳ノ備入ノ小
使、引充相渡可然哉

一徵兵署入用炭真木其他ノ諸費官費仕拂可然
哉

一東京鎮臺並高崎管所、指出候徵兵并召連罷
越候戸長副旅費ノ儀ハ旅費規則十等、引充
可相渡哉

但鎮臺並管所ニテ徵兵ノ者請取候迄各地
於テ滞在申ハ本文旅費十等ニ引充テ可相

渡哉

一常備補欠トシテ補充兵召集ニ付本年一月中
東鎮臺^京先高崎營所一指出候様昨明治六年十
二月中鎮臺ヨリ遣^レ有之差出候ニ付而ハ旅費
ノ爰前同様相渡可然哉

一昨明治六年二月徵募兵員縣下一召集本人並附
添ノ戸長副途中食料滞在中ノ宿料ホハ管内
郡中割ニ取立可申哉

但民費ハ可取立爰ニ候ヨ、村高ニ割賦可
然歟亦ハ戸敷ニ割賦ニ可然哉

一官費ノ分ハ第三常備金ノ内ヨリ操替進テ請

取方申上相渡可然哉

右徴兵諸費御渡方並官費民費ノ區別心得方相伺
候御指揮仰望仕候以上

明治七年一月十二日

長野縣參事楠寄寛直

大藏卿大隈重信殿



別紙神奈川縣伺鯨獵銃ノ儀ハ素ヨリ銃砲規則

中ニハ無之ニ付更ニ右規則ノ中一御加相成候
而モ可然哉ニ候得共元來厩洋社設立願出ノ節
既ニ鯨獵銃ノ儀ハ致記載有之候事故右社設立
御允許相成且稅額ヲモ御達相成候上ハ今更銃

稅別段貢納ニ不及方ト被存候依之同縣一御指
令按左ニ相伺申候

書面開洋社中捕鯨稅^鏡使用ノ^鏡ハ伺ノ通別

段貢稅ニ不及差許不苦候尤壬申第廿八号

公布銃砲取締規則ノ通諸事可取斗事

捕鯨銃使用ノ儀伺候書付

東京開洋社中當縣管下第壹區ニ番組横濱吉田
蓬萊町志丁目高吉田角松儀鯨澳銃買入方申出
候間届候処右銃砲使用ノ儀ハ御省ニ於而御
許可相成候趣然ル処右使銃ノ^鏡銃砲規則ニモ

記載無之捕鯨賣捌高貳拾步志貢納ノ夕ニ候上
ハ別段貢稅ニ不及使用差許ニ候而モ不苦候哉
右ハ時節ニ差臨ニ候^鏡ニ付至急何分ノ御指揮
被下度此段相伺申候以上

明治六年十二月廿七日

神奈川縣権令大江卓

大藏卿大隈重信殿

○

郵便寮存書 明治六年七月四号

新定原稿送規則同別紙之通凡布告有之
度此收相伺也

明治三年五月

参議

太政大臣

伺之趣申面々条別紙之通於其省布達可致也

明治六年五月十九日

郵便寮ノ送免許者之諸新定紙上ニ載スルキ
為其社ノ報知スル存稿本年七月一日ヨリ送
配達差許ニ条在規則ニ從テ各郵便局所取扱及

郵便箱、便宜差出可申事

年号月日

大蔵省 一 一 一 大隈

新聞原稿送規則

第一各新报社ノ額ニ依テ取送金ヨリ存下、遠國
ノ送配違ヲ用布、凡新报社ニ限ルトス

第二重量ハ四文目ヨリ踰ハカラズ

第三帯封或開封ニテ検査シ易キヨウ致シヲケル

但帯封或上包ハ報知スルキ易キ 新报社本社及報

知者ノ姓名地名ハテ詳細ニ記シ且朱ニ新

原稿ト記スル

第四原稿或中ニ他ノ封物ヲ竊ニ差入ルハ勿論報知スル

キ支柄ノ外一語タリ、唇筒標ノ文字或暗号、隠語、小書、教

ハシ、及カラス

第五此規則ヲ犯ス時、其原稿ヲ報知者、差戻シ定

額一倍ノ郵便税ヲ掛ハス

第六原稿報知スル者、姓名、住所、不分明ナルヲ取送

案ニ止メテ、復紙ト为人シ

有之、返被相定ス

月

取送頭前、取送

郵便行囊別送、係月定約同

神奈川縣内外郵便ノ外務省及同縣東京出張所、往
來ノ文書ハ頗敷巨多数ニ有之隨テ郵便税モ亦多分
府特別ノ遞送法有之度段中主々同別行表遞送
例別行表遞送トハカ子テ郵便役所ヨリ行表ヲ渡シテ郵便
物ノ數及量目ニ就テ税ヲ不收其行表一ヶ月或ハ一ヶ月ノ遞送税
ヲ定ムルヲ取計右遞送税トシテ一ヶ月金五十四ツ、相
收ノ積ヲ以テ駅遞頭与神奈川縣令ト可致約定ト存
右者新規ノ美三府相同申出

明治六年五月廿五

大藏一〇〇〇大儀一〇

伺之通

大政大臣一〇〇〇

今般西京大坂西地ノ間郵便馬車會社為致開業
會社ノ規則等ハ於駅遞寮致管知候条日々運用
ノ節途上ノ障碍無之様且道路ノ修繕向テモ心
付候様沿道取村、可相違事

大藏大輔井上馨芳

馬車取扱申合規則

第壹條

一馬車盛業ニ隨ヒ追々変換可致候得共差向四
輪車迄疋曳ノ馬車五輛并馬拾匹ヲ備ヘ左ノ
通分配可致置候事

細相認ノ郵便役所、御届可申事

第四條

一 双方共繼替ノ場所、着車ノ遲速毫毛無之様
注意可致者勿論ニ候得共譬ハ大坂ノ車自然
途中ニ於テ故障出来定則通り着車無之節ハ
西京ノ車毫毛不待合行會候処迄馳付其場所
ニ於テ繼替ノ手敷ヲ致シ其途着ノ次第巨細
相認ノ郵便役所、御届可申事

第五條

一 繼替場所前後ニ標杭ヲ建置御届ノ急請ニ
テ殿令ハ西京ノ車拾五丁ヲ後レ候節ハ五拾
錢ニ拾五丁ヲ後レ候節ハ七拾五錢夫ヨリ以
上後レ候節ハ尙因ツテ後レタル御届ハ為差
出可申事

第六條

一 兩地共出車定刻前ニ十分迄ニ諸器械ヲ整頓
ニテ毫毛没滞不致様可相心得事

第七條

一 切ノ諸器械極メテ清潔ニ掃除可致者勿論毫
毛破損ノケ所有之候ハ直ニ修理ヲ加一途

中ハ損害無之様厚注意可致自然検査ノ等閑
カ不都合ヲ生シ候節ハ御届口書^付ノ越度ニ付
其次弟ニ依^リ相^当ノ罰金為差出可申当^リ

第八條

一回轉中時ニ突聲或ハ喇叭ヲ以途人ヲ警告シ候
儀ハ勿論毫毛粗漏ノ挙動無之様厚注意可致
萬一御届口付ノ等閑ヨリ他ノ損害ヲ招候節ハ
其次弟ニ依^リ罰金或ハ遊逸申付候儀毛可有
之^事

第九條

一 乗客ハ對ニ毫毛不敬ノ挙動無之様厚可相心
長得別而細道橋梁渡船等ノ場所ニ於テハ格別心
配^リ用ヒ然^ル而親切ニ在諾可致事^ト

第十條

一 乗客ノ内何様ノ人何様ノ頼有之候共郵便請
取渡馬車總督或ハ事實不得止ノ外ハ毫毛休
車致御敷候事^ト

會計申合規則

第一條

一京坂兩府間小金橋鐵道所ノ経界トシテ西京
ヨリ小金橋迄ハ西京ノ持場ニ定メ小金橋ヨリ
大坂迄ハ大坂ノ持場ニ定メ馬車一切ノ費用
是兩地ノ會社ハ勿論此持場中諸入用向ニ至
道終而互地限リ適宜ニ所分可致事

第貳條

互地持場ノ内ニ而何様ノ故障何様ノ難^難支出来
候共會計筋ノ代ハ一社手限リニ而取賄可申候
得共何事ニヨリ必^必双方立會首事懇切シ尽^尽心腸
議可致事

第三條

一八幡新川ニ可備置車并兩地間道路橋梁渡船
等ニ関シ候費用ハ双方立會此統計ハ折半ニ
兩地ヨリ可取賄事

第四條

一統而ノ費用ハ一社手限リニ可取賄ト虽兩社
所得ノ馬車賃金ハ兩地ノ多少ヲ計算シ其合
高折半ノ上可致配分事

第五條

一双方共左ノ雛形ノ通乘車ノ切手ヲ製シ乘客

一人毎賃錢ニ引替渡置兩地着車前御届是ヲ
請取月末精算ノ證券トシテ互地ニ預リ置可
申尤此切手紛失為致候人アテハ更ニ賃錢申
請臨時費用ノ夕ノ積立可置事

第六條

一互地乗客ノ賃錢仕拂方ノ儀ハ月末ニ至リ及
方ニ而日夕預リタル乗車ノ切手兩社ノ元帳
ニ照ニ過不足精算ノ上此切手引替請取渡可致
事

第七條

一互地ノ小金橋道ノ乗客賃金ハ其仕立元可為
所有事

第八條

一双方共乗合多人數ノ節別仕立ノ馬車途中繼
替ノ都合難相成候ニ付双方共繼通ニ可致尤
賃錢ハ總而兩社折半ニ配当ノ事

第九條

一別仕立ノ馬車繼通候節御届口付ノ^精歸路ノ
為費用別取五十錢賃金ノ内可附寄事

乘車切手雛形

右者十月廿五日西人協談相交候上者御者口付
ノ者至迄此旨確守可致事

下京第拾區新町四條下
北四條町 米花小兵衛

壬申	御乗車此番号順次 少以御着座可被下候事	御渡可被下事	此切手御取落被候節 一更三賃錢申度候間途中 總替ホノ高紛失不致様 御用心可被成事	西郵使 馬車 會社
何月何日				
一乘客一人				
第何番				

此填舊田漕取扱所ノ者共更開業ノ會社、准
先致候名称ニ冠スル日本政府ノ文字ハ蒸気
船會社ノ種類ヲ示ス形容詞ニモ無之又日本政
府ノ蒸気船會社ト申茂ニモ無之全ク郵便ノ性
質ヲ著ス形容詞ニシテ日本政府郵便ノ運送ニ
會社ト申語句即チ日本政府ノ郵便ヲ運送スル
蒸気船會社ト云フ意ニ有之西洋國々ニモ是等
ノ例格多ク有之候得ハ決シテ内外ノ人民之ヲ
日本政府所有之郵便蒸気船會社ト誤リ認ルノ
恐有之間敷ト存候得共御達ノ趣ニ有之候ニ付

猶替稱ハ儀勤考仕候處極ニ世人ノ誤見無之様
 句読ノ病ヲ相除キ且其本意ニ相違ニ候ニ八月
 本政府ノ郵便ヲ運送スルト言ハス所謂共和政
 治ノ郵便等ノ例又照シ日本國ノ郵便ヲ運送ス
 ルト言フ以テ政府ノ文字ヲ帝國ニ變シ日本帝
 國郵便蒸氣船會社ト名稱為致所然哉ト存候右
 御差函ノ儀無ク候ト更ニ准先令令被降旨
 先般同ノ通其旨一般ニ御布告被下度此段相伺
 申候也 大藏大臣 井上馨 謹言
此封書申掛附十七日 河内 普賢 大藏大臣 井上馨 謹言

正院

御中

印

但日本國郵便蒸氣船會社ト
 名稱可為致事

十月三日

驛遞寮田議簿調查之部 明治六年七月 記録寮

商船並ニ商船乗組之者取締規則草按取調
之儀ニ付伺

商船之登簿海員之試驗其他是ニ屬スル各般ノ
事務ヲ統理スルノ規則^確定不致ヨリ弊害之甚
敷^{實ニ}難枚舉儀ニ有之候間略泰西海國ノ成規ヲ
按ニ適宜ノ規則御設立相成度然共殊ニ一局一
寮ヲ被問候ヲハ多分ノ經費モ相掛候儀ニ付是
迄海軍省開拓使ニ屬スル船舶ノ外官船ノ事務

ハ驛遞頭ニ相任レ且郵便蒸氣船ヲモ統轄為致
候因ヲ以テ此儀ヲモ亦驛遞頭ニ擔當為致度若
可然被思食候ハ規則方法逐次詳細為相撰猶
可相伺奉存候此段奉伺候也

明治六年七月廿五日

大藏省事務總裁參議大隈重信

大政大臣三條實美殿

伺之趣聞候條規則取調可相伺事

明治六年八月七日

大政大臣
三條實美

左藏

驛遞察原書

明治六年

記録寮

往還变换之儀ニ付伺

當縣下磐前郡平驛ヨリ田村郡三春表へノ往還
 筋後東合戸村ヨリ上三坂村下羽出庭村通仁井
 町村ト申路順ニ候處嶮岨山坡多ク有之殊ニ和
 名田下羽出庭両村之如キハ戸數僅二十軒程ノ
 小村ニテ人馬ノ繼立難行届廢驛申立モ有之旁
 地利里程檢査仕候處本道ニ比スレハ却テ山坡
 毛少ク平易ニ有之且里數モ相縮候ニ付下羽出

庭和名田西村共處驛申付別紙繪圖朱線之村
一人馬繼立處取設路次變換仕度依之此段奉伺
候也

壬申十一月二十日 磐前縣七等出仕富田高慶

同縣權參事 兒玉氏精

同縣權令 村上光雄

大藏大輔井上馨殿

磐前縣ヨリ往還道換驛場廢置之儀ニ付別紙之
通リ申出候ニ付篤下取調候処事實古道之方行
旅之不便而已ナラズ小村之繼立難行届旨無余

儀情狀ニ付別紙之通可及指令奉存候依之此段
相伺候也

明治六年一月十日 大藏大輔井上馨

正院

御中

伺之通

明治六年一月十四日 印

○磐前縣へ指令按

書面往還道換驛場廢置之儀ハ衆庶之便宜
ニ付聞届候條新古両道之里数新驛陸運會

社取設之方法共詳細取調可申立事

古來我國人嘗テ郵便ハ經國之要務ニシテ政府
專ラ之ヲ掌ルヘキノ理ヲ講究セサリニヨリ外
交開ケ既ニ外人之來住ヲ許スモ其郷信ヨリ事
業ニ就テ諸州ニ送ル郵便物ヲ我ヨリ達スル道
ヲ通セズ我國公私ノ信書スラ横濱等ニ設ケ在
ル英米佛ノ郵便局ニ依頼シテ彼ノ切手ヲ買ヒ
彼ニ税ヲ納テ僅ニ之ヲ達スルノニ殊ニ彼ヨリ
局ヲ設ケ其職員ヲ派出シテ我カ收ムヘキ一種

ノ税ヲ我カ境内ニ於テ領收セシム帝ニ交際普
通條理ニ戻ルルノニナラス實ニ獨立國體ノ一
大典ヲ缺キ容易ナラサル次第ニ付昨春以來内
國ノ郵便御開相成追テ方法一定ノ上ハ外國郵
便御開ノ儀モ必然御商議可相成折柄米國公使
フロニグ氏ヨリ先ツ米國政府ト郵便交換ノ御
條約相成候ハ、可然旨外務卿へ申出候趣モ有
之且同氏ノ周旋ニテ華盛頓府驛遞本院ノ官員
ブリヤニ氏モ來航致シ別紙條約案并ニ横濱神
戶長崎ニ於テ米英佛三郵便局ノ收入高及ヒ條

約相整外國郵便御施行ノ時是ニ供スルハキ經費ノ概算書ヲモ差出候ニ付彼是熟考候処早晚不可不開之郵便ニシテ實ニ即今可開ノ機會ナラント被存且一時外國人御雇入ノ費用并ニ横濱其他ニ郵便役所ノ造營等許多ノ費用モ有之候ハトモ現ニ計算有益ノ姿ニ有之加之交際普通ノ條理ヲ保存ニ且國典ノ缺ヲ恢補スルノ一舉ニ候間先ツ速ニ米國ハ此義御商議有之然ル後英佛兩國ハモ御商議ヲ積リ御決定相成度愈御決議相成候ハ、右條約ノ首尾米國公使ハ公然可

及談判旨外務卿ハ御達有之度依之別紙條約書案譯文并概算書相添此段相伺申候

明治六年一月十八日 大藏大輔井上馨

正院

御中

伺之通

明治六年三月八日 印

○外國郵便經費總計之概算

別紙ガリヤン氏ヨリ差出候經費概算書ニハ課長ノ俸金記載不致候ニ付今仮リニ之ヲ定ル左

ノ如シ

四千八百圓

同氏ヨリ出セル經費概算書ニ現數ハ左ノ如シ
壹萬四千三百圓

又郵便囊運賃ヲモ書載不致候ニ付之シ米國ニ
於テ或ル私有船ハ臨時郵便物之運送ヲ命スル
時ノ法ニ基キ信書一通ニ付二錢宛ト定メ又假
リニ外國ハ差出ス書狀ハ總テ米國迄ノモノト
見做シ平均拾錢宛ノ稅ト定メ是ヨリ其二錢ヲ
減タル時ハ即チ別紙收入高ハ万六千四百八十

七弗ノ二割算ニシテ左ノ如シ

壹万七千二百九十七圓四十錢

外ニ英佛兩國之條約モ相濟候後ハ事務増加候
ニ付隨テ費用モ増加可致故ニ前書アリヤニ氏
ヨリ出セル經費概算高之ニ割ラ是ニ充ルヨシ
即チ其高左之如シ

二千八百六十圓

合計

三万九千二百五十七圓四十錢然ルニ收入高
之概算ハ八万六千四百八十七弗ナリ故ニ經

費合計ト差引

四万七千二百二十九圓六十錢ノ益金ト相

成候理

譯文

横濱神戸長崎ニ於ケル米英佛各郵便局ヨ

リ一々年中送り出セル信書其他ノ郵便物

ニ就テ收ムル切手金高之概計

横濱ニ於テ

合衆國之分

四万千弗

英吉利之分

一万九千弗

佛郎西之分

一万六千弗

神戸ニ於テ

合衆國之分

三千六百弗

英吉利之分

千四百五十弗

佛郎西之分

十七弗

長崎ニ於テ

合衆國之分

五千三百弗

英吉利之分

五千五百弗

佛郎西之分

六十五弗

合計八万六千四百八十七弗

右之計算ハ最モ真實ニシテ信用スヘキ告知ニ

依リテ相立テ候ニ付正レキモノト信用致候尤
右之數ヨリ相過候儀ハ有之間敷ト存候

ム、バリヤニ午記

譯文

日本ト合衆國之間ニ郵便法ヲ整理スルニ
一ヶ年之經費概算

外國郵便課長之俸金

若干

同断助長之俸金

三千六百弗

同断書記役之俸金

横濱之分

二千弗

同断

長崎之分

二千二百弗

同断

神戸之分

二千二百弗

筆紙墨料

三百弗

畏紙簿冊之印刷

一千弗

布告類之印刷

五百弗

郵便囊錠鍵

五百弗

郵便切手印刷

八百弗

燈火薪炭

五百弗

役所ヨリ蒸氣船迄

郵便物運送賃

二百弗

雜費之見込

五百弗

現數合計一万四千三百弗

郵便囊運送賃ハ從前ヨリモ異ナルヘキニ付書

載不致候

政府ニ於テ御國人ヲ御用ヒ被成候方法ヲ承知
不致候ニ付各役所ニ於テ日本士官幾名之助勤
ヲ要スヘキ歟シ書載不致候然レ之ヲ概言セハ
兩國往復郵便法之大綱細目ニ就テ便宜之數ニ
限ルヘシト可致候

ムブリヤニ手記

郵便條約書按譯文

日本帝國ヨリ亞米利加合衆國へ承諾日確定ア
ラニト申遣ハサルヘキ郵便約定ノ草按

第一條

亞米利加合衆國ヨリ日本帝國へ日本ヨリ合衆
國へ發出スル信書新聞紙書籍ノ小包及ヒ商品
ノ見本雛形ノ往復外國或ハ其屬國ヨリ發出シ
或ハ是レニ送ルヘキ右ノ品ニノ往復ヲ兩國ノ
間ニ交換スヘシ

第二條

是日ヲ以テ航海スヘク能ク約束シタル船ヲ用
テ甲ノ郵便局ヨリ乙ノ郵便局へ郵便囊ヲ送ル
タメニ各局自ラ其方法ヲ設クヘシ且其國ノ費

用ヲ以テ其郵便囊ノ運送賃ヲ其船主ニ拂フベ

第三條

兩國往復ノ信書一通ノ郵便税ハ合衆國ニ於テ
十五「セント」日本ニ於テ十五錢トス而シテ信書
一通ノ定量ハ兩國片ニ半「ラニス」トス
一通分以上重量ノ信書ハ每半「オニス」或ハ其每
半「オニス」分數毎ニ右ノ税ヲ收ムヘシトス
此郵便税ヲ減セント欲スル時ハ此約書ノ施行
ヨリ十二「月」ノ後ニ於テ考定スヘシ

第四條

日本ヨリ合衆國ニ請取リタル郵便ノ税拂ヒ不
足カ或ハ全ク拂ハザリシ兩國往復ノ信書ハ其
不足税ノ上ニ五「セント」ノ過代ヲ命シ其過代金
ハ合衆國ノ郵便局ニ收メ置クヘシ又合衆國ヨ
リ日本ヘ請取リタル同様ノ信書ハ不足税ノ
外ニ五錢ノ過代ヲ命シ其過代金ハ日本郵便局
ニ收メ置クベシ

第五條

兩國往復ノ新聞紙書籍小包

總テ開刻印刷ノ紙
地畧畫圖活版書木

版書畫繪寫真石版商品ノ見本雛形種子穀ハ之
紙樂譜書等ヲ合ス

ラ發スル局ニテ時々定ムヘキ規則及ヒ左ノ額
ヲ以テ兩國ノ郵便局ヨリ傳送スヘシ

即チ重量四「オンス」ニ過キサル新聞紙ハ日本ニ
於テ四錢合衆國ニ於テハ四「セント」トス

書籍小包并見本品

一「オンス」ノ重サニ越ヘサルモノハ合衆國ニテ

二「セント」日本ニテハ二錢トス

一「オンス」ノ重サニ越ヘテ二「オンス」ノ重サニ越

ヘサルハ合衆國ニテ四「セント」日本國ニテハ四

錢ナルベシ

二「オンス」ノ重サニ越ヘテ四「オンス」ノ重サニ越

ヘサルハ合衆國ニテ六「セント」日本ニテハ六錢

ナルベシ

其包四「オンス」ヲ越エレハ其重量四「オンス」若シ

クハ四「オンス」分数毎ニ六「セント」六錢ナリトス

然リトイヘ凡此規則ニ左条ヲ添フヘシ

第一 郵便税不足无キ様前拂スヘシ

第二 書籍小包ハ他ノ封物ヲ入レ或ハ檢

査シ難キ様ニ之ヲ封シ或ハ刊剝セ

カ
サ
ル
書
翰
ヲ
入
レ
或
ハ
之
ヲ
添
ハ
總
テ
書
翰
カ
、
リ
タル
音
信
ヲ
添
加
ス
ヘ
カ
ラ
ス
但
某
ヨ
リ
某
ニ
送
ル
ノ
文
字
ヲ
書
翰
ト
ナ
サ
ス
許
ス
ノ
ミ

第三

書籍紙色ハ長サ二「フ」ト幅厚サ凡
一「フ」ト「ト」ニ越ユヘカラス

第四

兩國ノ郵便局ヨリ其國ニノ法律又
ハ規則ニテ輸入ヲ禁スル刊版物ハ
其國ヘ傳達スヘカラス

第五

前ニ掲ル物品ニ関稅ヲ賦スル間ハ
日本ヨリ之ヲ輸入スル時合衆國ニ
テ之ヲ取立テ同國ノ金庫ニ收ムヘ
レ右ノ物品ヲ合衆國ヨリ輸入スル
ハ日本ニテ之ヲ取立テ同國ノ金
庫ニ納ムヘレ

第六

右ノ物品ヲ除クノ外ハ兩國ノ間ニ
傳送スル新聞紙書籍小包及商品見
本ヲ配達スヘキ國ニ於テ是レニ稅
ヲ置クベカラズ

第六條

郵便税ヲ先拂不足拂セシ過代金ヲ除キ兩國ノ
間ニ往復セシ信書新聞紙書籍小包商品見本ノ
郵便税及書留郵便手教料片各郵便局ニテ等シ
ク之ヲ分配スヘシ而シテ其會計法ハ往復物ノ
各種一把握ノ重量ニ隨ヒ一オンス乃至一ポンド
ニ付左ノ定度トスヘシ

第一

郵便税ヲ拂ヒシ信書ヲ日本ハ送レ
ハ一オンスニ付二十五セント又日
本ヨリ請取タル郵便税先拂ハ信書
ハ総テ一オンスニ付二十五セント

第二

ニ付二十五セント又日本ハ送ル新
聞紙一ポンドニ付十五セント且日
本ハ送ル書籍小包見本品ハ一ポ
ンドニ付十六セントヲ合衆國郵便局
ヨリ日本郵便局ヘ拂フヘシ
郵便税ヲ拂ヒシ信書ヲ合衆國ハ送
レハ一オンスニ付二十五錢又合衆
國ヨリ請取リタル郵便税先拂ノ信
書ハ都テ一オンスニ付二十五錢又
合衆國ハ送リシ新聞紙一ポンドニ

付二十五錢且合衆國ハ送りニ書籍
小包見本品ハ「ホニト」ニ付十六錢
ヲ日本郵便局ヨリ合衆國郵便局ハ
勘定スヘシ

第八條

日本郵便局ハ合衆國ハ當テハ書留ニタル信書
其他ノ郵便物ヲ合衆國郵便局ハ達ニ得ヘク又
合衆國郵便局ニテモ日本ハ當テハ書留ニタル
信書其他ノ郵便物ヲ日本郵便局ハ達ニ得ヘ
シ

書留信書等ノ郵便税ハ常ニ前拂スヘシトス
郵便税ノ外ニ書留手数料ヲ拂ハシムヘシ但此
手数料ノ多寡ハ各發出ノ局ニ於テ之ヲ定ムヘ
シ

第九條

日本郵便局ハ合衆國ヨリ書留信書ヲ傳送ニ得
ヘキ他國并屬地等ハ當テタル書留信書等ヲ合
衆國郵便局ハ達ニ得ヘシ
日本郵便局ハ合衆國郵便局ハ取スヘキ郵便税
ノ外ニ猶右ノ國ニ及屬地等ハ當テハ合衆國ヨ

リ書留スル片合衆國ノ人民ヨリ取立ヘキ高ラ
合衆國郵便局ハ勘定スヘシ
合衆國郵便局ハ右ノ國ニヨリ日本ニ當テ合衆
國ヲ經過スル書留信書等ニ就テハ日本郵便局
ニ取立ヘキ郵便税以外ニ日本内國ニ於テ書留
信書等ヨリ取立ツヘキ高ラ日本郵便局ハ勘定
スヘシ

第十條

合衆國ハ日本ヨリ發シ合衆國ヲ越ヘテ他ノ國
ニ送ルル合衆國通リ記不往復物又合衆國

ヲ越ヘタル他ノ國ニヨリ日本ニ當テ送ル
モノモ總テ通常ノ郵便ニテ之ヲ遞送スヘキ仲
外ヲ勤ムヘシ
右ノ如キ往復遞送物ハ必ス完全ニ郵便税ヲ前
拂ニタルモノニ限ルヘシ
總テ日本ニ發シテ合衆國ヲ越ヘ他ノ國ニ遞
送スヘキ往復物ニ就テハ日本郵便局ヨリ合衆
國郵便局ハ合衆國ニ於テ右ノ國ニハ當テタル
往復物ニ就テ人民ヨリ取立ツヘキ税額ヲ此兩
國間ノ往復物ニ拂フヘキ高ニ加ヘテ勘定スヘ

合衆國ヲ越ヘタル他國ヨリ來レ日本ニ當ラタ
ル往復遞送物ニハ合衆國郵便局ヨリ日本郵便
局ヘ此兩國間ノ往復物ニ拂フハキ定度ノ料ヲ
拂フヘシ

第十一條

兩國郵便局ハ三月毎ノ末ニ於テ双方ノ間ニ交
換セシ往復并傳送書ヲ一便ニ付何程ト郵便毎
ノ銘細勘定書ヲ備フヘシ
右ノ勘定ハ双方ノ局ニ於テ每三箇月中互ニ承

流シタル諸取書ヲ證トシテ定ムベシ
右一便毎ノ勘定ヲ兩國ニテ比較考正ニ總勘定
ヲ以テ定ムヘシ且其較計ノ殘金ハ負ノ所ノ國
ヨリ其國通用金ヲ以テ他ノ局ヘ拂フヘシ
日本通貨ヲ合衆國ノ通貨ニ算シ合衆國ノ通貨
ヲ日本ノ通貨ニ算スルトキハ合衆國ノ一円ニ
テ以テ日本ノ一圓ニ均一ナリトス

第十二條

日本郵便局ヨリ合衆國郵便局ニ當テ又合衆國
郵便局ヨリ日本郵便局ヘ當テタル公用往復書

信ハ両局トモ一切無税ニ定ムヘシ

第十三條

両局互ニ承諾ノ上前条ノ規則ニ遵ヒ猶巨細ノ規則ヲ設クヘシ而シテ其規則ハ両局ヨリ至當ノ理アル報告アリテ後之ヲ廢止得ヘシ

第十四條

合衆國郵便局ヨリ此郵便條約ヲ確定セタル四ヶ月ノ後ニ至リ横濱ニ在ル合衆國郵便管理役其他日本國ニ現在シ又是ヨリ後設クヘシ郵便管理役ヲ全ク廢止スベシ

第十五條

此條約書ハ兩國郵便局ニテ確定ノ後四ヶ月ヲ經テ施行スヘシ

第十六條

此條約ハ両局ヨリ一年ノ報告ヲ以テ何時タルニ廢止シ得ヘシ

別紙之通外務省へ御達有之度此段相伺申候

別紙

米國ハ郵便御條約御申入之儀ニ付最初正院

同濟御省御折合之末同國人サミエール、エム、ブ
リアニ本月十四日當省雀入相成候間此段及御
達候也

明治六年二月十八日

大藏省

外務省

御中

尚以同人雀入之儀ニ付定約并追加譯文寫ニ
冊差進申候也

別紙ノ通外務省へ御挂合有之度此段相伺申

候

別紙

郵便御條約之儀先ツ米國政府へ御申入ノ儀
ニ付同國人サミエール、エム、ブリアニ本月廿
四日米國郵便船ニテ華盛頓府へ差遣之彼地
ノ都合ニ寄歐羅巴へモ差遣候間通行切手御
差越有之度此段及御挂合候也

明治六年二月十八日

大藏省

外務省

御中

外務卿米國公使往復書簡并森代理公使御委任
狀寫供覽候

代理公使森有禮ハ之御委任狀案

帝國日本政府ト合衆國米利堅政府ト郵便交換
之道ヲ開カント欲ス故ニ汝有禮ニ命ニ其筋官
員ト協議ニ條約取組調印スルノ全權ヲ付與
ス

上文ノ意ヲ証セシタメ明治六年二月 日東京
宮城ニ於テ新ヲ名ヲ署ニ璽ヲ鈐レ之ヲ付與ス

御諱

御國璽

奉敕

外務卿副島種臣花押

我國ト米國間トノ郵便交換條約取結ノ儀貴下
ハ更ニ委任候ニ付委任狀並條約書案米公使往
復書簡寫別紙一綴差廻ニ候右ニ付米人サミ子
ル、エム、ガリアン儀元同國驛遞寮勤役ノ者ニテ
能ニ其事務ニ熟練致居候趣ニテ公使テロニク、
ヨリモ推挙有之旁以今般驛遞寮於テ同人ヲ雇
入別紙ノ趣申付其地ハ向テ出登為致候委細ハ

同人ヨリ御聞取ノ上尚相談ヲ被遂貴下ヨリ米
國其筋ハ引合約定可被到候尤右約定書案々條
條中些細ノ條件ハ双方ノ便宜ハ實地目撃ノ次
第ニ因リ改定又ハ加除等有之可然候右申入候
也

二月日

副島外務卿

森代理公使殿

尚、本月十七日電信ヲ以下命迄出帆可見合
旨相達置候儀ハ前次委任ノ儀ニ付差止候事
ニ有之候尤右條約取結ノ上ハ兼テ申達置候

通リ都合次第歸可被致候也

○
嗚

以手紙致啓上候然ハ今般我日本政府米國合衆
國ト我日本帝國間トノ郵便ノ交換ニ付尚一層
至當ノ法ヲ建シタメ右條約ノ儀ニ付都合次第
貴國其筋ノ長官ト談致度就テハ御尊案ノタメ
郵便條約草案差進申候右閣下ニ於テ御承諾相
成候ハ、右草案合衆國其筋ノ長官尊ノタメ差
送り度存候右可得貴意如此御坐候拜啓

明治六年二月九日

外務卿副島種臣

米利堅合衆國特命全權公使

チヤルレス、イ、ブロンク

閣下

馬

今般貴政府ト合衆國政府ト郵船交換之約條御
取結有之度趣ニテ右御草案御廻ニ有之拙者ノ
意見御問合ノ本月當日附ノ貴翰落手致シ候篤
ト致拜候処方今大貌利大厄臣ト合衆國ト取結
ル條約面ト全ク同一ニシテ拙者ニ於テハ右
草案至極至當ト存候尤右ト断交確定スルハ我

政府而已ニ有之候得ハ拙者ヨリ別段此外ニ何
共難申上候

一外國ト郵便交換ノ法ヲ設立スルハ各國普通
ノ政權ナレハ日本政府ニ於テモ外國ト條約ヲ
結フヲ得ヘキニ從來日本ハ是ヲ要セサリニ
今日此舉アルハ文明ノ域ニ進歩シ西國ニ行ハ
ル、完全ナル政躰、如クナルヘキノ證ニシテ
我政府ニ於テモ必ス日本政府ノ此盛舉アルヲ
滿悦可致且條約又ハ其他ノモノニ因リ閣下ヨ
リ隨宜ノ助力御求メ相成候得ハ我政府ニ於テ

好_レ助力可致儀ハ疑ヒ無_ク之候
一郵便ノ事ハ拙者ノ能ク心得ル處ニ非サレハ
此條約合衆國驛遞長官ト談判_シ些細ノ條ニ改
正致_シ候權有_レ之候代人御差遣相成候方可然ト
存候
一兩國間ノ和親條約改正之時ハ郵便ノ條約モ
更ニ改メサルヲ得サレノ時宜ニ可至ト存候間
此條約モ同時同場所ニ於テ改正スヘキモノニ
致置方可然ト存候

一當今貴國內郵便ノ法適宜ヲ得タレハ將來日

本從來ノ外國郵便モ貴下ノ所管ニ托スルトシ
聊外國居留人ノ不便有_レ之間敷ト存候ハ右ノ
趣我政府へ可申立且貴國政府ヨリ御申立ノ條
約採用可致様次便ニシテ我國政府へ可申遣候敬

白

於橫濱千八百七十三年第二月十一日

合衆國公使官

シ、イ、ヲ、ロ、ニ、ク

外務卿

閣下

別紙 正院、御届取調相同申候

御届取

兼、相伺候米國へ郵便御條約ノ儀外務卿ヨ
リ同國公使ヲ、ロニク氏、及談判候処同氏於
モ引受周旋可致者ニ付同時伺濟ノ趣ヲ以
同國人サミエール、エム、フレヤン氏ヲ別紙ノ
通り約定ノ上相宥即今華盛頓府へ差遣ニ同
府在留森代理公使ヲ經テ米國政府へ右御條
約并諸規則共協議為致愈同國ニ於テ協議相
整候旨報知次第我國在留英佛ニ公使、談

判ノ上右フレヤン氏、直ニ米國ヨリ右三ヶ
國へ差遣ニ各其地在留我公使ヲ經テ前同様
夫、協議可為致被存候此段外務卿同意ヲ以
相伺申候也

年号月日

大藏 大輔井上馨

正院

御中

甲部 日本皇帝陛下政府ノ大藏大輔井上馨閣
下ト乙部 亞米利加合衆國住民サミエール、エム、
フレヤン氏ノ間ニ取結ヒクル定約ノ覽

甲部ハ亞米利加合衆國其他ノ開化ニタル此世
界ノ國民ト郵便ヲ開クヘキヲ欲シ且乙部ノ日
本政府驛遞頭ノ命令ヲ奉シ其ノ允許ニ隨テ此
ノ郵便ヲ定業ニ且是ニ從事センヲ欲ス乙部モ
亦此ノ業ニ從事センヲ希フ是ニ於テ左ノ條件
ヲ約定セリ

若シ乙部ハ右驛遞頭ノ允許ニ隨テ充分ニ事ヲ
執リ約定年限中此郵便ノ業ヲ定メ且其取扱ヲ
務ル片ハ甲部ヨリ一月四月四百五拾圓ヲ俸金ト
シテ乙部ニ給スヘシ但是ハ此ノ約定書調印シ

日ヨリ初メテ合衆國英國佛國及ヒ日耳曼國ノ
郵便條約ヲ引受ル日迄續クルモノトシ然ル後
乙部ノ俸金五百圓ニ昇ルヘシトス
甲部ヨリ乙部ニ此年限中横濱ニ於テ適當ナル
家宅ヲ家具ヲ設ケスニテ供給スヘシ
乙部ハ成ルヘク速ニ合衆國華盛頓府ニ往キ同
所ニ於ケル日本政府ノ公使ノ手ヲ經テ日本ト
合衆國トノ郵便ヲ同等ノ基礎ヲ以テ規則ヲ建
テ且之ヲ定業スヘキ條約ヲ彼ノ適任士官ト共
議スヘシ

甲部ハ乙部ノ薦舉ニ據テ郵便ノ事業ニ就キ大ニ熟練且其ノ細目ヲモ全ク領會セタル助官一名及ヒ書記三名ヲ用ユヘシ

甲部ヨリ此約定書調印ノ日ヨリ三年ノ期限満ルノ時カルホルニヤ洲サンフランシスコ迄ノ一等旅客船賃ヲ乙部ニ與テヘシ

乙部ハ病疾ニテ此約定ノ事務ヲ執リ能ハサルト一ヶ月ニ過レハ其ノ引入リ中ノ俸金ヲ減セラルヘシ

若シ部其職務ヲ怠リ或ハ不法ノ所為アルトキ

ハ甲部之ヲ免職スルノ自由ヲ保スヘシ

此郵便條約合衆國適任ノ上官ヨリ一致協議スルニ於テハ即チ此ノ約定モ亦此調印ノ日ヨリ

三年ノ間確然タルヘシ

前件ノ如ク乙部ニ疾病及ヒ他故ニヨリ一ヶ月

以上其職掌ヲ奉スル能ハサルヲ以テ俸金ヲ減

却スル等ニ関涉スル此條約ノ件マハ乙部日本

地内ニ在留スルノ間ニ限ルヘシ

紀元一千八百七十三年第二月十四日此締約

ヲ確證スルニ共ニ手書調印ヲ以テス

大藏大輔井上馨印

サミユールエムブレアニ

某月日日本政府大藏大輔井上馨閣下ト合衆
國人サミユールエムブレアニ氏トノ追加約
定ノ覺

若シ合衆國適任ノ士官此郵便條約ヲ拒ムトキ
ハ其ノ之ヲ拒ムノ報知ヲ乙部ニ達スルノ日ヨ
リ此約定ハ廢物トナリ一ノ用ヲ成サ、ルモノ
トス
本約定書ニ記載シタル一助官三書記官ハ次ノ

俸給ヲ支給スヘシ即チ助官ハ一月三百圓書
記官ハ各個一月二百圓宛トス
日本ヨリ合衆國夫ヨリ歐羅巴夫ヨリ日本國へ
ノ道中ハ第一等ノ船車賃金ヲ甲部ヨリ乙部ニ
支給スヘシ
前ニ記ス船車賃金ノ外一月ニ付ノキニド
ル二百二十五弗ヲ旅費トシテ甲部ヨリ乙部
給スヘシ

紀元一千八百七十三年二月十四日締約ノ

確證トシテ共ニ手書調印ス

大藏大輔井上馨印

サミユールエムブレアン

米國政府ト郵便御條約御申入ノ儀ニ白華盛頓
希在留森代理公使へ委任ハ外務卿ヨリ差遣ニ
候答執テハ當省ニ於テハ驛遞頭ヨリブレアン
氏ハ別紙ヲ通リ指令書披與可為致ト存候此段
相伺申候

明治六年二月二十日 澁澤正五位

正院

御中

御之通

明治六年二月十日



亞米利加合衆國ト日本帝國トノ間郵便ノ規則
ヲ定テ其間等ニ裁理スヘキ條約ヲ結フノ目的
ノ間國營路ノ有司ト共議スヘキ事ヲ華盛頓所
在留我公使ニ達セラルクテ故ニ是下同府ニ對
シ右公使ヲ物ニ此目的ヲ達スヘキヲ命ス
且同府ニ於テ其當路有司ノ此郵便條約ヲ採

上ハ足下直チニ英國倫敦佛國巴黎及李國伯
靈ニ至リ各地在留我公使ヲ忠告ニ且之ヲ助ケ
其命ヲ奉レテ右ノ各國當路有司ト各兩國間郵
便ノ規則ヲ建テ且同等ニ裁理スヘキ條約ヲ共
議スヘキトシテ命ス
足下此度奉スル所ノ使命ヲ敏速ニ奏成セシ為
シ足下ノ權力限リ称譽スヘキ方法ヲ書サニ
シ我帝國政府ノ為メニ冀望ス
前書ノ通り井上大藏大輔ノ命ヲ以相達候也
年号月日

驛遞頭前寫密

サミユールエムブレアン殿